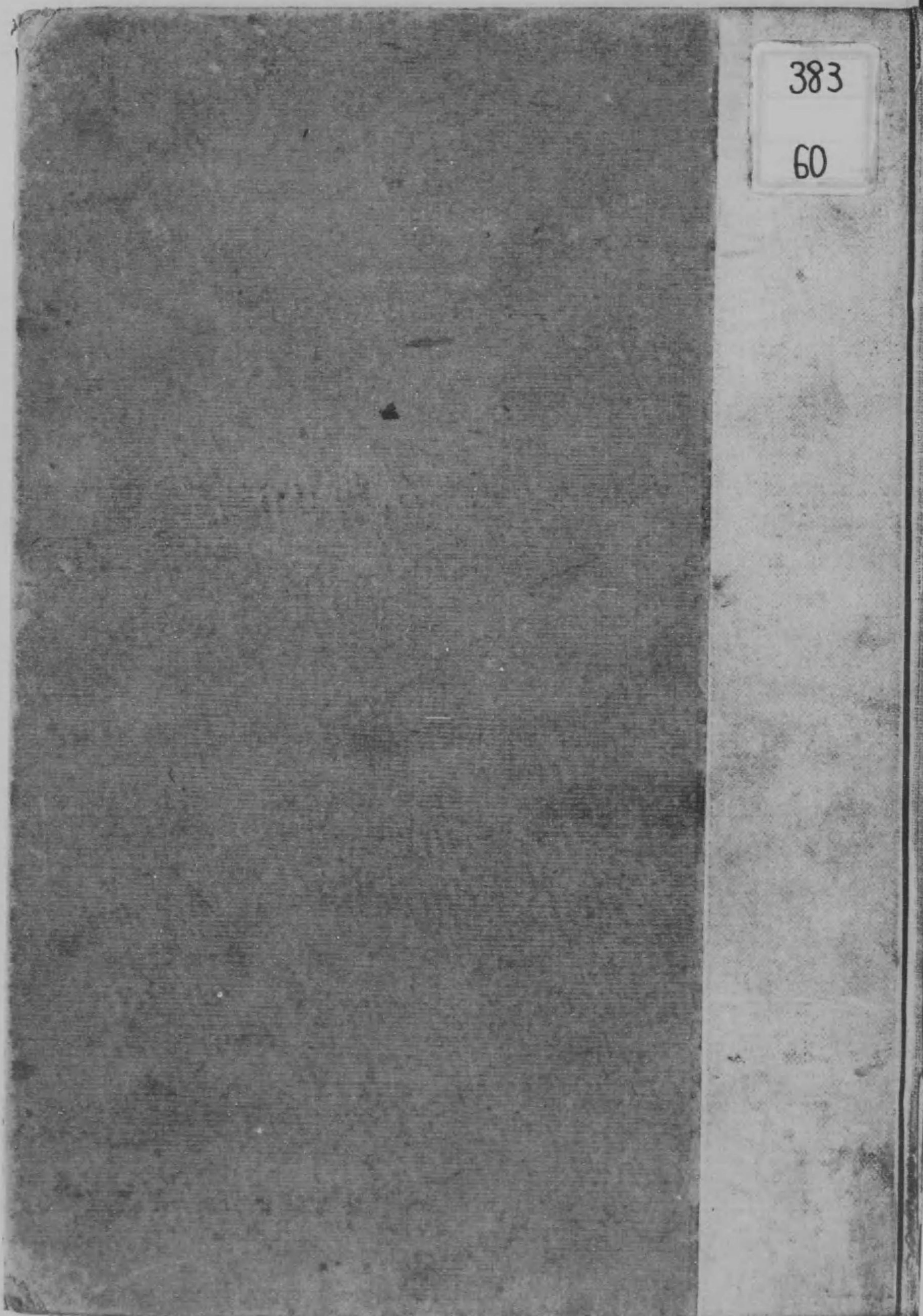


始



383

60







部一の記日繪湖雪

383-60



及
昂
湖

石井
柏亭
編



序

今年は父鼎湖の廿三回忌であると同時にまた祖父鷺湖の五十回忌に相當する。これに際して兩者の遺作の陳列と云ふ考も無いではなかつたが、私の意はそれよりも追善的冊子の刊行に傾いて居た。父は早世の方であるにしても、二十餘年を経過しては流石に同代の相識も日一日少くなりつゝある。それだから私は此機會を失したくない。私は今父及祖父の完全なる傳記を編むの暇がない。即ち兩者の繪日記を以て此冊子の本体となし、之れに添ふるに父と祖父との生活と藝術とに對する私自身の所感と傳聞とを以てすることにした。繪日記は繪と相待つて興あること固よりであるが、こゝには其或實を示すの外すべて繪を除くことを餘義なくされた。鷺湖の繪日記は特に斷片的であり、鼎湖のそれにしても僅に三ヶ年の記載に過ぎないが、其處に各の時代の面影の暗指さるゝものがあつて、故人と相識ることなきものにさへ何等かの興味を興へ得ると信ずる。

挿畫にしても私は必ずしも兩者の生涯の最重要なる作品を複製することなく、寧ろ不用意の際に出でたる寫生とか漫畫とか下圖のやうなものばかりを選んだ。而して其範圍を家藏のものに限つた。父祖の業を繼いだれば幸に其等の遺物を散逸することなしに今日に傳へて居る。

大正八年十二月

柏亭生識

鷺湖及鼎湖目次

鷺湖及鼎湖.....一

鷺湖繪日記抄.....五一

鷺湖繪日記抄.....六三

鷺湖文藻.....七九

鼎湖繪日記抄.....九四

蘇翁湖



鼎湖

蘇翁湖鼎湖小照及筆蹟

「次 目 書 挿」

蘇翁湖繪日記の一部
 蘇翁湖鼎湖小照及筆蹟
 蘇翁湖筆 江郊鶴巢圖
 鼎湖版畫 玉堂富貴
 鼎湖筆 不忍晚景
 鼎湖筆 犬
 蘇翁湖印譜
 蘇翁湖繪日記の一部
 蘇翁湖筆 實かづら
 鼎湖印譜
 鼎湖筆 豊公醜圃花見の下繪
 鼎湖繪日記の一頁
 鼎湖繪日記の一頁
 鼎湖筆 軍雞
 鼎湖筆 金洞山第二石門

鷺湖及鼎湖

鈴木鷺湖は文化十三年、下總金堀村の一農家に生れた。金堀と云ふ所は今千葉郡豊富村のうちに含まれて居る。船橋を東北に距ること二三里に過ぎないが、此頃でも依然として不便な所である。それは東京灣に沿ふた千葉街道、それから少し引込んだ成田街道の何れもと利根川流域との中間に位して、文化の至つて及ばない地方である。

さう云ふ地方から鷺湖のやうな書家の出たのは寧ろ異數と云ふ可きである。父親の徳兵衛と云ふ人は梅中と號し算數に長けて居たと云ふことであるが、算數と藝術との間には聯絡を見出すことが出来ない。鷺湖には一人の兄と一人の姉と一人の妹とがあつた。總領の兄久兵衛は鬚の伯父さんと呼ばれて居たことから考へても、何か田舎には珍らしく鬚などを生やした一風變つた人間であつたかと思はれる。其鬚の伯父さんなる人は看板書きを業として居たが、殆ど家に居つかず道具函——まだ金堀の鈴木家に遺つて居る——を肩にしては妾を連れてそれからそれと仕事をして歩くと云ふ風な、道樂者の困り者であつた。それで次男の筆三——鷺湖の幼名

の一つ、本當の名は漸造と曰つた——に後を繼がせて鬚のおちさんを廢嫡して了はうと云ふ評議もあつたが、鶯湖は兄を排して自ら跡目を繼ぐことを好まなかつた。

鶯湖は其等の理由もあつたかして、二十一二のときに郷里を出て江戸へ上つた。即ち天保七八年の頃である。江戸では先づ駿河臺の織田と云ふ旗本に奉公して居る姉さんの處を頼つて行つた。

御邸に勤めて居る處から『御邸の伯母さん』と呼ばれた鶯湖の姉は名をおたきと云つた。織田家へは十五六の時から奉公に上つた。父親は行儀を見習はす爲めに江戸の御邸へ彼女を出した譯であつたが、殿様の御手がついておたきは男の子を生んだ。それを聞いた金堀の父親は大變怒つて彼女を勘當しやうとさへした。けれども殿様がおたきの身上を保證されたのでそれは無事に納まる事が出来た。おたきの生んだ子が生きて居るとよかつたのであるが、それは不運にも二十一ばかりになつて死んでしまつた。

すつと後の明治になつてからの話であるが、駿河臺の邸を賣拂つて織田家が外へ引移るに於いて伯母さんはどうも御邸を辭して郷里へ引込んだ。十五六の時から六十餘歳迄だから伯母さんは随分長く奉公したものである。此伯母さん、否私達にとつての大伯母様は明治二十五年

の秋八十幾歳の高齡を以て金堀に亡なられた。私などもばんやり知つて居る筈であるが、どうも其面影が浮んで來ない。鶯湖と違つて相柄の恐くない、寧ろ柔和な、さうして背は低くとも小太りの女であつたさうだ。此伯母さんは春になるとよく東京へ出て來ては、石井の家や織田家を見舞つた。郷里の鈴木の家は世鬚の伯父さんの爲めに散々にされた。それを繕ふ役は此伯母さんと鶯湖とであつた。それだから彼女は郷里に居ても決して輻の利かない厄介者ではなかつた。

二

江戸へ出て來た鶯湖に對つて御邸の姉さんは小間物屋でもやつたらよからうと曰つた。品物の仕入れなどはどう云ふ傳手を以てしたか知らないが、鶯湖の筆三は小間物の夜店を出したりした。其恰度夜店を張つたのが松月と云ふ畫かきの家の前であつた。畫かきと曰つても往來から見える所で猪口畫を描いて居ると云ふやうな市井の卑い畫かきである。

筆三は自分の店をそつちのけにしてひたすら其猪口畫に見入つた。そんなに畫が好きならおまへおれの弟子になつたらよからうと松月の云ふに任せて彼は松月の學僕になつた。而して猪

口書を習つた。松月と云ふのは筆達者な男であるが、随分下品な浮世繪風の畫をかいた。家藏中に彼れの手になつた一つ家の婆様の懸物が一幅あるが、これによつても畫品の低さは分る。

鶯湖は其後松月の所で知合になつた猪口こうと云ふ人の方へ移つた。猪口こうは藤森文亦と云つて文晁の弟子になつて居た。後に鶯湖を文晁の處へ伴れて行つて呉れたのも此文亦であつた。猪口こうと云ふ人間が道樂者で仕様がなない爲めに、鶯湖が其家の世話を焼いたこともあるさうだ。家藏の粉本中に『文亦畫本』と云ふ印の捺してあるのが大分ある。之等はもと猪口こうの参考品であつたに違ひないが、其等のなかにはあまり上等な粉本は無い。文亦是鶯湖よりも三つばかり年上の男であつた。

鶯湖の筆は御邸の姉さんの御蔭で、其後佐久間町に家主の株を買つて貰ひ、其處にしばらくは自炊をして住んで居た。猪口書を描かなければ生活が出来ないので據なくそれを續けて居た。其頃寫したらしい鶯湖の粉本も家に遺つて居るが、何派と云ふ事に拘泥する處もなく、其頃は寧ろ四條派、狩野派系統の書を餘計に寫して居た様である。

三浦乾也と鶯湖とはじめて知已ちかひになつたのも彼猪口こうの許もとであつた。猪口こうの處へ寄る人間は大概やくざ者ばかりだが、なかで話せるのは筆と云ふ男一人だと乾也が評して居たと云

ふことだ。乾也は鶯湖よりも五つ年下であつたが、既に一家を構へて居つた。さうして其頃猪口こうの家に厄介になつて居た鶯湖はよく乾也の處へ遊びに行つた。

鶯湖は郷里に居る頃から島田村のおよしと云ふ女を妻に貰ふ約束があつた。それは何年のことだか判然はつきりしないが、佐久間町に所帯をもつ様になつて、漸くおよしを呼び迎へて同棲することになつた。天保十三年鶯湖二十七歳の時に長男の悦太郎が生れた。乳呑兒をふどころに入れて猪口畫に筆を執りながら、彼れは本當の畫ばかり描いて居られない其身の上を嘆じたことである。

三

鶯湖ははじめ一鶯と號して居た。天保末年頃の模本や寫生畫などを見ると一鶯と鶯湖と交署こあし名して居つて、果して何時頃から鶯湖の稱を始めたかがはつきりして居ない。ただ弘化から嘉永頃になつて全く一鶯の號を廢してしまつた丈は確かである。此頃のものを見ると畫も書も幼稚であるが、模本などに使つた墨も紙も悪く、自ら暮し向の苦しさを語つて居る。

天保何年に文晁の門に入つたかも不明である。併し文晁は天保十二年に死んだのであるから

多分は其死に至る迄の晩年僅々一二年をこれに師事したに過ぎないのではないかと察せられる。鷺湖の漫筆帖の一つに谷川へ架けた橋を渡る一艇の駕籠と、それに尾する一人の男とが描かれて『随寫山先師、聞泉聲暮橋』と題されたのがある。駕籠の中なるは文晁其人で後に尾するは自分の姿であらう。過ぎし日のことを想起したをぞろ書きであらうが、それにしても文晁に従つて何處へ行つた時のことだか、分つて居ないのが残念である。

弘化四年の春から夏へかけての漫筆帖『明珠瓦礫』などを見るともう相當に書技に長けて居ることは分るが、それでもまだ鷺湖の本色を發揮しては居ない。一家の風をなしたのは嘉永の三四年頃からあとで、即ち三十五六歳から四十歳位迄の間にそれは大成したものゝやうである。

嘉永元年鷺湖三十三歳のときに二男の貞次郎が生れた。これが私の父の鼎湖である。面白いのは漫筆帖の一つに鷺湖が宗像翁の所蔵にかゝる田村將軍守本尊と傳へられた佛像を寫した其傍に九歳の悦太郎と三歳の貞次郎との同じものを寫生したのが貼りつけてあることだ。鷺湖も子供の稚氣ある畫に興味をもつて保存して置いたに相違ない。

鷺湖の前描きで家に遺つて居る懸物としては具足の圖があるに過ぎない。紺糸で緘した近世の具足が櫃の上に載せられたのを後生大事に精細な筆を以て寫生したものである。これは粉本

の間に突込まれて居たのを父が取出して私の初の節句の時に表装したのであつた。天保十四年の作で應需と書いてあるが、誰れか注文者があつたのを何かの都合で先方へ渡さすにしまつたものかも知れない。

佐久間町の名主の片岡某は其頃よく鷺湖の面倒を見て呉れた。神田明神の素盞鳴命の花車人形を鷺湖が圖案したりしたのも此名主との關係があつたからであらう。

乾也は其頃笠翁風の精緻な細工によつて世の賞讃を博して居た。越後侯の囑に應じて衝立を作り、また松平確堂侯の囑によつて百鬼夜行の大小の鞘とか蘭亭の袋戸のやうなものを作つた。陶工としては立派に認められて居た譯である。或日御邸の姉さんの來合せて居る時鬚を大たぶさに結つて大きな紋のついた羽織を着た男が入つて來た。姉さんはこれを御國ものかなどと思つておどで鷺湖に訊ねると『どうして御國ものどころか江戸つ子のチャキく』と答へた。其大たぶさは三浦乾也であつたのだ。

嘉永三年三月鷺湖は御徒町の關忠藏なる人の持家を買つて其處へ移つた。それは神尾市左衛門組御徒士竹内民次郎地面内の家作で建坪十六坪餘りの小さな家であつた。其代金受取證が残つて居るので見るとそれは六兩で購はれたのであつた。御徒士町へ住むには士分でなければな

らぬので、鷺湖は名義上松平貫一郎と云ふ旗本の家來と云ふことになつたのであつた。

四

『煙霞活』と關雪江の題した嘉永三、四年の手帳は大部分上州旅行の山水寫生と途中通覽した畫幅の縮寫とに充てられて居る。嘉永三年の三月末に江戸を出發して、神通先生、蘭洲、文圭、少哉、榮風等の連中と桶川宿の栗原權右衛門と云ふに泊つたこと、又鬼石の井筒屋に泊つたことなどが書いてある。鬼石夜景として神通と榮風との間にはさまつて枕を並べて寝た鷺湖自身の姿もある。此手帳の端に少哉と云ふ人の駄句は載せられて居るが、他の諸先生に就ては何物をも知らない。井筒樓の主人が神通先生に贈つたと云ふ靈芝の寫生と靈芝を手にした同先生の髯を生やした異様な相貌とは他の頁に畫かれて居る。續いて山だの泉石だの、寫生もあるが此時は上毛の山を歩いた様である。

妙義へ行つて金洞の奇勝を探つたのは翌くる嘉永四年の晩春であつた。其時は中嶽の東南宮崎村の鈴木重兵衛方に一ト月餘も逗留して彼突兀たる石山の寫生に耽つた。甚滑稽なのは其鈴木氏の所藏なる古狸の畫と云ふ要領を得ないものを鷺湖が帳面の一頁へ寫して置いたことであ

る。妙義の寫生の結果は後年出版した『もゝのたね』の數圖となつて居る。

これも嘉永三年の某月に日光奉行の中坊某に隨つて日光山へ行つたと云ふことや、同じく六年内藤某に従つて京都に遊び、到る所の眞景を寫した、其結果畫法が一變したと、鼎湖の書いた略傳中に記されて居るが、今家に傳はつて居る漫筆帖のなかには上方旅行に關するものは一向見當らない。

鷺湖が北越に遊んだのは安政三年の初夏の頃で、揮毫の依頼も仲々多く盛んであつたらしい。其時は門弟の湖城と云ふのを一人供に連れて行つた。此年は大暴風雨があつて水が出たりしたが、前年は彼名も高い大地震であつた。大地震の時鷺湖は第一番に外へ飛び出したが、子供を出さなければと思つて家の中へ引返さうとしたが何か頭上へ物が落ちて來た。もう駄目と思つて又外へ出たら、長男の悅太郎が貞次郎を背負つて出て來たので先づ安心したと云ふことだ。

やゝ厚い支那の紙を繼いで手製したかと思える一冊の折本には、嘉永三年頃から安政文久頃に至る凡そ十餘年間の折にふれての漫筆が收められて居る。これには水滸傳、三國志、列仙傳扶桑隱逸傳等の書籍を繕きながら思ひついた人物畫題の草稿があるし、又落款の下書きなども入つて居る。鷺湖は仙人と云ふものが好きであつたらしく、此冊子のなかにも仙人の話の二三

が畫にされて居る。

大體に於て鷺湖は無論支那癖の人間であつたに相違ない。けれども山陽や華山が決して支那萬能でなかつたやうに、彼れも亦日本趣味を解して居た。而して隆古文晁等のあの時代の他の先輩も概其點に於て一致して居た。鷺湖の畫は或一個の師風を繼承したものでなしに、古今和漢の畫蹟を廣く覽瀾く研究した上句に成立つたものである。假令暫時文晁の教へを受けたとは云ひながら、其畫風は却て文晁に似ず、寧ろ華山隆古に近いものである。鷺湖が如何に古今和漢の畫蹟を探つたかは家藏の夥しい粉本を見ても分る。粉本の一部は他から買求めたり、又は門弟をして寫さしめたものであるが、其大部分は自身が寫したものである。其勤勉と其精力とは驚く可きものだ。粉本のなかで最數の多いのは師たる文晁のそれであるが、隆古華山椿山等も皆好む處であつたと見えて相應に多い。支那畫の山水人物等も決して少くはない。

鷺湖は花卉が好きであつたらしく、其早年から晩年に至る迄花卉の寫生を絶へずやつて居る。一幅の畫としての場合には山水と人物とを得意として居たが、花卉を寫生することは餘程好きであつたと見える。それは必要上やつたのでなしに、全く花卉の愛の爲めにされたものと云つてよい。

五

貞次郎が五歳になつたとき、家に近いことでもあり、懇意なものだから、讀書と習字とを關雪江に教はり、幼い時から好きな畫を、追々と父の鷺湖に教へて貰つた。而して宗像蘆屋と云ふ人に鼎湖の號をつけて貰つた。兄の悦太郎も矢張尚を習つて、菊潭と號して居た。

鼎湖の十歳頃に寫した粉本は大分遺つて居る。無論幼稚ではあるが歳に比してはよくやつた方である。而して樗園と云ふ人の催しにかゝる展覽會に『行平佐野渡』の圖を出品した。これが鼎湖の初出品であつた。

其同じ樗園の展覽會へ『周茂叔愛蓮』の圖を出したのは翌年十二歳の時であつた。而して其同じ年に鼎湖の身の上に變動が起つた。それは三浦乾也に望まれて其養子となつた事である。此時の有様は恰度本書に載せた安政六年六月の鷺湖繪日記に記されて居る。其中介者は結城と云ふ人で、其話は六日十日に定り、鼎湖は二十五日になつて三浦の方へ引移つた。而して名を貞太郎と改めた。

併し此頃の乾也はたゞの陶工ではなかつた。彼れは造船家であり、仙臺の藩士であつた。乾

也をして造船に志さしめたのは矢張嘉永六年に浦賀へ來た米船であつた。彼れは浦賀へ行つて外船を一覽し、つく／＼海防の必要を感じて、造船の書を調べた後、蒸汽船の雛形を三つ作つて、一を水府に、一を津輕に献じ、他の一を開老阿部伊勢守に献じて大に汽船の必要を建言した。

其結果か安政元年になつて乾也は幕府から造船傳習の命を受けて長崎へ行き、蘭人に就て造船のことを學んだ。船をやるに就てはそれに關係ある硝子製造のこと、溶鑛爐、反射爐、大砲等の諸術をも習得しなければならなかつた。此一年ばかりの乾也の苦心と勉強とはなみ大抵のことではなかつたらう。

翌安政二年の正月彼れは傳習記事に圖本を添えて幕府に復命した。彼れの意はすぐにも軍艦を造つて見せると云ふのであつたが、幕吏は之れを信せず、彼れは不平に堪へなかつた。然るに仙臺侯が之れを聞き、幕府に請ふて乾也を招いた。それで安政三年乾也は仙臺へ行つて寒風澤に造船所を開き軍艦の製造に着手し、翌四年それが落成して開成丸と名づけられた。兎に角小さいにしろ何にしろ日本ではじめて洋式の軍艦が出來たのだから諸藩は之れを聞いて驚いた。仙臺侯は其功を賞して乾也を藩士の列に加へ、百石二十人扶持を給せられた。翌安政五年領内

の海岸其他を航海して江戸品川灣に碇を下し、友人達を招いて船を見せたときの乾也の得意思ふ可しである。

乾也は其頃淺草の大番組屋敷のうちに住んで居た。鼎湖が三浦へ養子に行つたとき、乾也の妻のおえいは或事情の爲め家に居ず、仙臺に残つて居たので、おえいの妹のおてるが娘のおふじを連れて箱崎から招かれて來た。おふじは別人でもない私の母である。

おえいおてるの姉妹は深川八幡境内に住む石井佛心の養女であつた。婿の乾也と佛心とはどうも折合が悪く、乾也が一旦家を出てしまうと、其後を追つておえいも家出をしてしまつた。併し鼎湖を養子とする頃には石井への詫が叶つて乾也夫婦は再び深川の家へ出入をする様になつて居た。妹のおてるへは萬右衛門と云ふ婿を貰つて、箱崎で空樽問屋を營業させたが、これも亦佛心の氣に入る所とはならなかつた。

おてるが三浦の家へ招かれて來た時、おふじは三歳であつたから何も記憶する筈がないけれど、鼎湖の方では其時のことを覚えて居た。併し此三歳の女兒が將來自分の配偶となる可き運命を有つて居やうとは思ひもつかなかつたであらう。八月八日に乾也はまた仙臺へ立つて行つた。九月に入つて佛心の妻なる普明尼が亡なつた。

鶯湖の漫筆帖の著るしい特色の一つは、謹嚴なる楷書隸書及び精細典雅な花卉蟲魚の寫生の傍に、それとは全く反した奔放豪快な漫畫と、殆ど判す可からざる亂暴な文字とを見ることであるが、彼れの酒癖を知る上はこれを解釋することは極めて容易である。父鼎湖も可なり酒を嗜んだが鶯湖程のことは無かつた様である。鶯湖は實に酒の讚美者であつた。彼れが盃を手にした自像に題した詩、「醒來飲酒醉來眠。此法不禪又不仙。百兩黃金何可換。從來此是我家傳。」は彼れの意を得たものであつたに相違ない。又これも盃を手にした他の自像に彼れは「世のうさを知らで酒くむうつし繪の我身は我れもうらやまれぬる」など、戲題して居る。又樽を横にしてそれに寄りかゝつた男の略畫の上に「一醉後の一時は仙家の一年なる可し。我五十年は仙家の二十一萬六千年、樂しからずや」など、勝手な太平樂が並べてある。

鶯湖は一面随分八釜しい肝癢持ちであつた。鼎湖が小供の時鶯湖に伴れられて書畫會へ行つて随分困らされたこともあるさうだ。或書畫會の席で文晁の高足たる佐竹永海が「筆も近頃は仲々旨くなつた」と云ふやうな豪さうな口をきいたのを耳へ入れて非常に憤慨したこともある

と云ふ。何しろ一刀を携へて居るものだから、酔ひに乗じて、むきに斬つてしまふなど、言ひ出すには他のものが困つたらしい。

酒に酔つて何か憤りでもして歸つて來ると、鶯湖は寢て居た小供達を起してしまふのださうである。さう云ふ時に何かすると叱られるから、小供等はたゞ起されたまゝ小さくなつてちつとして居るより外はなかつた。

さう云ふ風にぶり／＼することもあるが、また親しい趣味の合つた人達と酒を呑んでは恐ろしく上機嫌になつて浮れたものゝやうである。而して相當に諧謔を解して居たやうである。漫筆帖の何れにもは必ず彼れの狂句狂歌戲文の書かれた或頁がある。誰れに教へを受けることもなく斯う云ふ狂體の詩歌が好きであつたらしい。彼れは酔に乗じ、起つて踊ることも屢であつた。これも本書に載せた半折大の書箋を横にして書いた晩年の繪日記で見ると、一日訪れた貸本屋某なるものに鶯湖が「こと／＼の蟲」と云ふ踊を傳授して居る所が畫かれて居る。

鶯湖の神佛に對する信仰はどんなものであつたか、よく分らぬが、特に觀音大士を信じて居たことは事實であらう。安政四年惡疫が流行して人の死ぬものが多かつたとき、彼れは楊柳觀音像を畫き上梓して病者へ施した。極めて謹嚴細緻な筆である。其板木はまだ家に遺つて居る。

『大士圖贊』と云ふ書物の一頁にも鷺湖の描いた観音の坐像がある。また郷里の方から頼まれては神佛の御影を描いたのもある。船尾の蟲神と疣神、それから大穴の西光院のなどがそれぞれある。

『もゝのたね』と云ふ冊子は仙人の ことを書いたもので、鷺湖の自費出版にかゝる。新年の贈りものとして知人に配つたものであらう。文久元年に其一卷を出して同三年の三卷に至つて終つたやうである。巻頭に次のやうなことを書いて居る。

『余仙を慕ふ癖ありて唐土の仙傳を讀みけるが、皇國にも亦仙無きに非ず。其圖傳を著さんと欲すること久し。然るに淺學にして見聞するもの少し。就中女仙に於ける最稀なり。因て其傳を得んが爲めに此圖傳より著し初めぬ。伏而乞仙傳を知れる四方の君子余に告て望む處を足らし玉へかし』と。

第一卷の霧嶋山中に於ける五助の話は友人松浦多氣志樓主人の『西海雜誌』から抜いたのであり、第二卷奥州の彌五郎の話は三浦乾也の官游日録から抜萃したものであつた。それから此冊子の挿繪は門人や子供達との合作になつて居るが、いづれも鷺湖の下圖によつてやつたものに相違ない。此版木はまだ家に遺つて居るが、もう蟲に喰はれて滅茶苦茶になつて居る。松浦竹



江郊鶴巣圖

鷺湖筆

四郎の蝦夷紀行にも爲湖と其一門とは挿畫の筆を執つて居る。竹四郎自身も一寸畫を描くのであるが、友人等の作品を乞ふて變化を添えやうとしたのであつた。

七

鼎湖は三浦の方へ移つても、決して畫筆を絶つたのではない。三浦へ行つた翌年十三歳のとき『鐘馗嫁妹』の圖を展覽會へ出した。『もゝのたね』の挿畫にも鼎湖三浦の署名がある。けれども乾也の思想が單に藝術の上ばかりになく、種々科學上の新智識の方に働いて居たから、鼎湖も自ら其感化を受けたのであらう。文久二年九月十五歳の時松代藩士の村上英俊と云ふ人に就いて佛語を學び出した。乾也の著書の挿畫にす可く西洋の書物から種々な圖を寫すやうなこともやつた。

17

造船のあとで乾也は幾度も仙臺へ行つた。頼まれもせぬに藩へ金の世話などをして、或時は賞められて御自服などを賜はつたが、又或時は折角の骨折も無駄になつて、金は外の手で調つたこともある。仙臺藩から國詰めになつてはどうかと勧められたが、乾也自身は行きたくなし一時は鼎湖に仙臺へ行かぬかと云ふ話さへあつた。爲湖はそれもよからうと承諾を與へたさう

であるが、鼎湖は親兄弟の許を離れて獨り奥州へ行くことを肯んじなかつた。佛心も其話を聞いて、それは乾也が間違つて居ると曰つて鼎湖の言ふことに同じた。

文久二年の秋のはじめに乾也の妻おえいの妹のおてるはまだ三十二と云ふ若さで此世を辭した。而してあまり評判のよくなかつた婿の萬右衛門は離縁となつた。だから後に遺されたおふじと其弟の松次郎とは祖父の佛心に養育されることになつた。然るに翌文久三年になつて引續き佛心老人も亡なつた。其處で親類中相談の結果、鼎湖をして三浦家から轉じて石井家の家督を相續せしめ、乾也をしてこれが後見役たらしめると云ふことになつた。鼎湖は時に十六歳であつた。

石井と云ふ家はもと深川八幡の境内にあつた二軒茶屋と云ふ旗亭の一つであつたが、佛心の親の代に其株を買つて來たので、佛心の實家は生吉を姓として居た。ところが天保度の御改革以來永代寺内でさう云ふ營業の出來なくなつたのを機として佛心は家業を廢めてしまつた。今一軒の松本と云ふ方は營業を續けて居たが、其主人の兄が龜交山と云ふ文晁門の畫家で同じ境内の額堂の近くに住んで居た。佛心はよく其所へ遊びに行き、従つて多少畫を習ひました。佛心は山古庵と稱し、好んで大津繪を畫き、大津畫師佛心と號して居た。極氣樂な身分で永代寺

の社役と云ふことになつて居た。それで其跡を繼ぐ鼎湖も亦當然永代寺の社役を申附けられた譯である。

乾也が鼎湖を連れて仙臺へ行つたのは慶應元年の極月朔日であつた。外のものが附いて行くよりは鼎湖の行つた方がよからうとの事であつた。仙臺では家老の但木土佐が乾也を庇護し、また學頭の大槻習齋も乾也の味方であつた。處が乾也が行つて永の御暇頂戴を願ひ出でた時は恰度藩の頭目が入れ替つて、但木土佐は退き、却て反對黨の世の中であつたものだから、乾也は散々の不首尾になり、改易仰せ附られると云ふことになつてすごとく江戸へ歸らなければならなかつた。

鼎湖は前に横濱位へ行つたことはあるけれど、旅らしい旅をしたことはなかつたのだから、此行によつて随分學ぶ所が多かつた筈である。寒い時のことだから奥州本街道を止めて暖かな濱街道を行つた。太平洋の大海をはじめ見て其壯大に感じたことが、其時の鼎湖の紀行文『仙臺行記』に記されて居る。此寫本には道中風物の寫生畫が挿まれて居るが、素朴な愛す可きものである。降り出した雪に松島見物を思ひ立つたところが雨に變つて弱つたと云ふことも記されて居る。

此旅行は十二月朔日の出立から翌年四月三日の歸京に至る五ヶ月間にわたつて居るが、其大部分は作並温泉の逗留に費された。はじめはさう永逗留のつもりでもなかつたのだらうが、乾也が足を痛めたりして思ひの外長くなつた。歸りには本街道を行かず、山中を通つて鑛山などを見て平へ出た。もう歸りには仙臺藩士でないのだから大手をふつての道中も出来なかつた譯である。

幕末のごたごたになつては誰も藝術を以て身を立てやうと志すものはなかつた。鼎湖は慶應二年の十月から横濱へ佛語の修業に行くことになつた。傳教師のジラルドと云ふ人を師とした。はじめは乾也の弟子の大工某の家に同居して自炊したりして居たが、後に高島屋の二階に、あとで帝國ホテルの支配人となつた横山孫一郎と一緒に住んで居た。横濱の修業は一年半位も續いたらうか。もつと續けて居たならば鼎湖の進路はどう云ふ風になつたか分らない。然るに水野日向守と云ふ大名が佛語の教師として鼎湖を抱えたいと云ふ話が出て、家のものはうつかりそれに動かされてしまつた。それで鼎湖は修業半ばにして横濱から江戸へ呼戻され、四人扶持を受けて其殿様と臣下等とに佛語の初歩を教へた。

其うちに王政復古となつた。大名は佛語の稽古どころでなくなつた。鼎湖は慶應四年(明治

元年)の三月に水野家を辭した。

八

乾也は維新の騒ぎの時横濱へ行つて居た、それから外國船へ乗つて仙臺の方へ行つたと云ふ事實がある。深川へ歸つて僅に二三日経つてのこと、即ち慶應四年七月五日晝の八つ時頃白麻の羽織に金裂をつけたまだ若い役人(大野安兵衛と云ふ)が來て少し調べる筋があるから乾也に糺問處まで同道しろと云ふ。乾也は少しも騒がず、ふどころの書類を遺し、紙入だけ持つて彼等に引かれて行つた。今夜は歸らないかも知れないと乾也は家人に斷つて家を出た。鼎湖は心配なものだから見えがくれに其後を尾けて行つた。おえいはまたそれを心配して貞は一體何處へ行つたかなど、訊いて居た。

佐賀町の駿河屋と云ふ仙臺御出入の商人の家には其頃仙臺藩の若い者共が寄宿して居た。大槻如電氏も其處に居たのであるが、變なものが來たのを知つて逃げて深川の家へ來たら、其時はもう乾也の引かれた跡だつた。『あゝ先生が今、さうでしたか、私は逃げて來た』と如電氏は私かに曰つた。

鼎湖はそれから毎日のやうに糺問處へ通つては差入れをする門前の辨當屋で其様子を尋ねた。辨當屋の人は『御變りもありません』と答へたが、果して分つて居たかごうだか。國事犯のものには碌々調べもしないで、ごん／＼斬つてしまふと云ふ噂も立つて居たので、家のものゝ心配は一通りでない。鷺湖や其門人なども下谷から見舞に來た。鼎湖は松浦竹四郎へも赦免の運動に行つたし、其外少しでも傳手のある處を頼つては様子を聞合せて貰つたり嘆願書を出したりした。

偶々かゝりの者を知つて居る人があつて、一日鼎湖は其人と一緒にかゝりの役人を某旗亭に招いて御馳走した。二十五兩使ふといふがと其時曰はれて鼎湖はこれを信せず、家へ歸つて相談したが、家でもそれを否決したので、其方の話はそれぎりになつた。處が木場の或且那で糺問處の御頭と膝組で話の出来る人があるのを頼つて漸く其御頭にこちらの意を通することが出來た。其爲めでもあつたか奥羽の戦が片附いた後乾也は一番早く出牢することが出來た。

七月の五日から八月の二十一日迄一ト月半を乾也は獄中に暮らした。尤もすつと座敷牢に居て本牢の方へは入らなかつた。竹の皮づゝみの飯に生味噌と澤庵どが附いたのを與へられた。晝どか夜どかには何か菜が附いたと云ふ。入牢して間もなく使をよこして、温袍ど何か煮しめ

をこしらへて持たして呉れど曰つて來たので、大急ぎで煮しめをこしらへてきりだめへ入れて持たせてやつた。乾也は牢に居て体屈なものだから竹で小さな算盤をこしらへた。調べを受けたのは二三度で、朝敵へ内通をしたらうと云ふ疑ひなのであつたが、私は無筆ですからそんなことは出來ませんと言ひ通してしまつた。

鬚ぼう／＼で腰繩で出て來た乾也の姿を見たとき鼎湖はあまりいゝ氣持がしなかつた。

三 浦 乾 也

右今般御結構を以 御免被 仰付其方へ引渡候條爲受取早々可罷出候 以上

大總督府 糺 問 局

せがれの孝心に免じて赦し遣はすと云ふやうな意味のことを言渡されたのである。

最初乾也を引立てに來た若い男が假宅へ遊びに來て金が足りなくなつたので使を深川の家へ寄越し、乾也の件はよしなに計らふから金を貸せと云ふ譯で、據なく鼎湖が持つて行つてやつたこともある。下役のこんな男に何も取計らへた筈はない。乾也出牢の後仙臺侯から孝心を賞する意味で鼎湖に五兩の金子を下された。鼎湖は其五兩をもつて黒羅紗の羽織をこしらへ、家のかたばみの紋を繡はせた。

其年の十二月十二日、鼎湖は富岡神社の禰宜を申付けられた。而して貞太郎を鼎と改名し又重賢と改めた。

九

鶯湖は安政五年の元旦に仲御徒士町へ轉居した。それは後年河村雨谷翁が住んで居たあの通りでもう少し上野寄りの方であつた。其頃提灯店には古筆も居り、關雪江が居た。大沼枕山は摩利支天横町に居ると云ふ風で、下谷は文人の巢窟であつた。

慶應三年二月鶯湖の妻なるよし女は死んだ。明治二年頃に布佐の魚問屋の妹某を迎へて後妻としたがそれは鶯湖の氣に入らなかつた。鶯湖の死病は肺勞であつた。が、それ程永く患つたのでもない。佐藤春海先生の診察をも乞ふた。死んだのは明治三年の五月二十二日であつたが其年の正月深川へ年始に來た時など元氣なものであつた。其年は珍らしくも元旦に年始に來て乾也と酒宴をはじめた。さうしておえいとおふじとを蕙方詣りに黒船神社へ出してやつた。二人が歸つて見たら乾也も鶯湖もいゝ機嫌になつて互に勝手なことを言つて居た。

慶應四年の元旦から始められた『入寶録』の最初の幾頁は正しく入寶の記録であるが、後に



鼎湖版畫

玉堂富貴

なるごそれはまた例の漫筆帖に變化して行つた。黒い罫紙の上へ縮圖をしたり花物の寫生をしたりしてある。其一つ大山蓮華の寫生は庚午仲夏七日としてあるから恐らくは絶筆に近いものであらう、『山房無聊愛花如妻』云々の書き添えがある。

病中の看護は御屋敷の姉さんや、娘のおたけや、鼎湖などがした。鼎湖は其悪くなつてから殆ど行き詰めであつた。後妻は病氣の重らぬ先きにもう離別されて居た。

鶯湖は書料の前禮を取つても決して直ぐにそれを使はうとはせず、書が出来たとき始めて其金を用ひるのであつた。それだから死後なほ其引出しに畫絹と一緒になつた封筒のなかに金子の入つて居るのもあつた。先生は前金を御使ひにならぬと聞きましたからと曰つて死後書料を取戻しに來たものもあり、また何か御書き遺しのものを戴きたいと云ふのもあり、また何とも云つて來ぬのもあつた。何でも死んだ時に七十幾兩とかの金があつたので葬式其他も立派に出來た譯である。金のことに就ては乾也とは大違ひでキチンとして居た人である。

鶯湖は晩年に我古の號を用ひて居た。全然改めてしまつたと云ふのでもなく、たゞ主に我古と書いて居た。『我古りてつとむることの懶さにはかまど左右の袖をとりけり』『乗鳥は雲の外へとあそばせて月は流るゝ水と去るらん』など、打興じて居た。つまり鶯湖を省略した様なも

のである。名を雄、字を雄飛と呼んだのは可なり前からである。それから水雲山房主人とも號して居た。落款にはよく東臺山麓花香深處と云ふ様なことを書いた。

交友は狭い方でも無かつた。枕山、秋巖、林齋、柳圃、雪江、石亭、晴湖、東寧、蘆洲、芥庵、冬崖、楓湖、波山、桂巖と云ふ様な書畫家や詩人達は皆其友人であつた。此うらで現存するのは松本楓湖氏たゞ一人である。門下には杉陰を始めとして蔦峯、柳塢、曲川、柳塘、珠津竹溪、湖城、關山等の人々があつた。死後之等の人々へはそれ／＼に遺物を分けた。

明治初年江東中村樓(今の美術俱樂部)に百疊敷の座敷が初めて出来たが、其大廣間の床にかゝる大幅は當時の大家を網羅した合作であつて、大變布置がよく出来て居ると思つたら、それは鷺湖が大體の位置を指定したのであつたさうだと當時の記憶ある某氏が曰つた。永海あたり猪口屋の筆かと嘲笑された鷺湖も晩年には大分頭をもたげて一方の大將株となつて居たらしい。たゞ其書術が圓熟して善くなつて來た頃は恰度幕末の政變時に當つて、王政復古後美術の新しい隆興を見るの暇なくして死んだのは不幸と云ふ可きである。鷺湖の筆には獨創もあると思ふが、其最謹んで描いた畫に支那模倣の痕が多く、漫筆及寫生等に却て天真の流露を見ることは彼れ一人に限られたる弊ではなく、華山などにも共通な、當代の美術思想の然らしめたもので據ないことである。

十

鷺湖が死んだとき長男の菊潭は東京には居ないで、静岡の方に居た。彼れは勘當されて居たのである。彼れの周圍には須源と云ふやうな人の善くない骨董屋が附纏つて居た。菊潭は彼等の虜となつて椿山の賈物などを書かされて居た。鷺湖の死を傳へたのも其須源等の連中であつた。

鷺湖の死後其家財はみな深川の方へ運ばれた。三十五日迄は鼎湖が居たが、さう／＼も居られないので、其後は弟子の杉陰が留守居をして居た。御邸のおばさんが居る以上、假令江戸に歸つて居ることも、勘當された菊潭を家へ入れなかつたのであるが、漸く詫が叶つて菊潭は下谷の家へ入ることになつた。

菊潭は鷺湖の怒りつばい所だけを遺傳して、時には随分亂暴であつた。杉陰が早く立退かないと曰つて大に怒つて深川の家へ來て曰つた。「杉陰は實に怪からん奴です。斬つてしまはうと思ふ」さうしたら乾也の妻がそれに答へて「悦さんさう斬る斬るつて御曰ひだけれども牛蒡や

胡蘿蔔を切るやうな譯にはゆきませんよ』と曰つた。漸く下谷の家へ入るやうになつた時深川に預つて居た鈴木の荷物を船で受取りに來た時など彼れは仙臺平の袴を穿いて居た。彼れはそう云ふ風にすべてぞんざいな人であつた。

親が子供の家の方へ行くのも可笑しいが、深川は木場の方へでも引移りたいと鷺湖は曰つて居た。それで下谷の家は何の手入れもしなかつたので、随分雨も漏るやうな始末であつた。其處へ入つた菊潭は、とてもこんな家には住めない。家のなかで傘をさす様な有様だと大袈裟に曰つた。それから暫時してとうとう下谷の家は壊し値で賣つてしまつて、菊潭は池の端に家を持つた。今空也餅のあるあたりに清涼亭と云ふのがあつた、其傍の處で庭はもうすぐ池に接して居た。

鷺湖は随分八釜しい人であつた。而して幼い時から菊潭はよく親父の叱る所となつた。菊潭も生れつきがよくなかつたのであらうが、父親の八釜し過ぎたのがなほ悪かつたのかも知れない。貞次郎は兄貴の叱られるのを見て恐くなつた爲めに自ら慎む結果、殆ど父親に叱られるやうなことが無かつた。或時御邸のおばさんは菊潭に托して貞次郎とおたけへの贈物をした。其後下谷の家へ來た時貞次郎が禮を曰はなかつたものだから、物堅いおばさんは鷺湖に向つて『ど

うでもいゝやうなものだが此間悦に頼んで貞に物をやつたのに何の辭儀もしないのは悪い』と曰つた。鷺湖は『貞が物を戴いたことはない、それでは悦がそれを取つてしまつたのだらう憎い奴だ』と怒つた。

菊潭の悪くなつた其原因は或は鷺湖がまだ年の行かぬ彼れを或人の供として長崎へやつたことにあるかも知れない。鷺湖は要するに兒童の教育者として不適宜な人であつたらう。

菊潭は幾度鷺湖の方をしくじつたか分らない。深川の家で詫言をしてやつたのも何度かであつた。或時追はれて家を出るにあたり、彼れの母は三つの握り飯を與へた。鷺湖の門弟の一人が彼を送つて行つた。生來犬好きの悦太郎は尾いて來る一疋の犬に母親が心づくしの握り飯を平氣で一つ與へてからなほ道を歩いた。腹が空くので二つ残つた握り飯を門弟と二人して分ち食つたら、其なかゝら二分金が一つづゝ出た。それを見て悦太郎は先刻の一つを犬に呉れてしまつたことを悔いた。(これは彼れの死後其妻のおすゝさんが話したことである)

深川の家で世話して菊潭をもと乾也の居た組屋敷の中の小さい家へ住はした事がある。雇婆は居たが、貞太郎も時々手傳ひに行つて居た。井戸へ水を汲みに行つたりするのを他が見て『あなた三浦さんの方を御出になつたのか』など、訊いた。貞太郎は悦太郎よりも背丈が高いの

で却つて兄さんかと思はれた。『貴君はい、兄様を御持ちで』などと悦太郎は他から曰はれもした。彼れは遊歴して路用に困るとよく田舎寺に頼み込んだものである。田舎寺へ行つてはじめのうちにはまめやかに門内を掃き掃除したりなどして神妙に働く。其うち或機會を得て和尚に己れの才を示す。和尚が土地の人達に話をして襖書其他の注文となる。彼れはそんな真似をして屢田舎を放浪した。而して随分道樂もした。

湯島天神の境内に何か云ふ俳諧師があつて、其處に其姪が一緒に居た。菊潭はいつしか此おすゝと云ふ女と關係してそれを内縁の妻にした。さうかうするうちに菊潭——其頃は號を帆雨と改めた——は放蕩の結果が報つて来て、悪性の病毒からの半身不隨になり、もう仕事も出来ない様になつた。瘵癆を起したりする度に深川へ迎ひを寄越されるのも困ると、池の端の家を疊んで深川の方へ引移らせる事にした。

帆雨は半身不隨になつて口もきけない様になつて居た。何かおすゝが氣に入らぬことをしたとかで、恐ろしく腹を立つて身をいら立て、自由にならぬ身體を前へすり出さうとしたことさへあつた。深川へ来てからおすゝに女の子が出来た。半身不隨の人の子が出来るのは可笑しい所から、それは帆雨の種ではあるまいと云ふ疑ひも起つた。

病人の居る室は何だかいやな臭ひに満ちて居た。病人の室から出た衣服などにも其臭ひが附纏つて居た。帆雨は半身不隨になつて三年目即ち明治七年の十一月に世を辭した。

帆雨は花鳥を主として書いたが、書風の椿山に似て居る爲めにそれは椿山の落款に書き換へられて居るのもあると云ふことだ。

十一

父（これからは鼎湖と呼ばずに父と曰ふことにする）が大藏省へ出仕したのは明治三年の十月五日であつた。それだから鷺湖は父の官吏生活の端緒が開かれたのを見ずして死んだ譯である。これは鷺湖の門人の久保田蔦峰が平岡熙一と知つて居た爲めに纏まつたのであつた。蔦峰に話をしてから一週間位で忽ち定つて仕舞つた。平岡は當時たしか營繕頭であつたかと思ふ。其時手鑑として父の差出したのは佛語の書簡一通と 太上感應篇か何か支那の繪入本を寫したのと、西洋の燈臺の圖を寫したのであつた。度量衡改正掛と云ふ方へ出たのであるが、其上には澁澤榮一氏が居た。

新政府に召出されることは其頃の人にとつて可なり榮譽と考へられたらしい。御用召には麻

上下でなければならぬが、生憎持合せがないので隣りの仙波と云ふ人の處から「引」と云ふ字の紋の附いた麻上下を借着して、大小の大の方には立派な造りの大刀を帯びて行つた。所が出て見ると舊幕時代の形式は大分打壊されて居り、上下は強て麻でなくともよかつた位であつた。出来たばかりの明治政府は變動が多く、官制の改革は頻々たるものであつた。改正掛の役は忽ち記録寮に含まれることになつて、翌四年に父は記録少屬から權中屬に進み、五年には中屬に昇級した。父の仕事は主として書圖であつたが、澁澤氏の方の關係から第一國立銀行の建物の圖を引いたりした。これは役所の仕事ではないから宅調と云ふ事にした。建築家の仕事迄兼ねなければならぬ程當時はどの方面にも人が足らなかつた。

父は五年の正月末から約半年を紙幣寮の方へ出張して、新舊公債證書の下圖を調製した。之等の下圖には八咫鳥が皇帥を先導するとか、神武の進軍に金鷄が弓端に留つたとか、天孫降臨とか、神功皇后の朝鮮征伐とか云ふやうな、上代の歴史畫が選ばれた。父はこれを陰影のやうなもの、附いた和洋折衷體で描いた。斯う云ふ畫風は乾也に命せられてした洋書からの寫しものや、また佛語修業のため横濱在留の當時ツォグマンの畫を見たりした感化によつて育まれたものらしい。



基湖集

七年の正月頃にも秩祿公債證書下圖の爲めに又紙幣寮へ出張した。さうかうするうちに父は紙幣寮の方に知已も出来、又洋風の版に關する興味も生じたので、記録寮の仕事よりも其方が面白くなり、轉勤を志望した。其結果十月本官を免せられて紙幣寮の御雇となり、石版術を擔任するやうになつた。

銅版師の玄々堂松田敦朝とも紙幣寮で相知るやうになり、恰度玄々堂も石版を創始する意があつたので、父は役所の歸途玄々堂へ寄つては石版を試みた。石を寄越して貰つて家で描いたものもある。すべてが手探りだつたので、其苦心にも拘はらず、思はしい効果が擧らなかつた。元寇の圖、朝鮮に於ける加藤清正、村上義光、名和長年と云ふやうな歴史畫の數圖は其頃に出來た。之等は墨摺のまゝで若しくは筆彩色を施されて坊間に賣られた。

明治九年紙幣寮が、彫刻會社へ雇はれて來たボラルドを聘するに及んで、父もはじめて正式の石版法を傳習することが出來た。はじめ彫刻局石版部見習と云ふことになり、次いで技生となつた。十年には中丸精十郎に就いて遠近法を習得した。小山正太郎に下圖を描いて貰つた第一回内國勸業博覽會鳥瞰圖は父が石へ描いて印刷局(紙幣寮を改稱)で刷つたものだが、それはすつと進歩した本式の石版になつて居た。此博覽會へ出したクロモ石版の玉堂富貴圖も亦父が

苦心の作であつた。金でつぶした楕圓形のなかへ玉堂富貴を収めたのであるが、日本最初（絶對的に最初とは曰へないかも知らぬが）のクロモとして記念す可き印刷物である。（挿畫）

父が彫刻部の石版科長として執務して居た其後の數年間に當時の民間ではとても出來得可くもない精巧な複製的石版の幾種が仕遂げられた。正倉院御物集や、國華餘芳として刊行された伊勢大廟の寶物や古名流の筆蹟帖や、古金銀圖、波間の錦（魚介）と云ふやうなものが父の監督のもとに行はれた譯である。之等は當時の局長たる得能良介氏の意見によつて出來たのであるが、其後次第に斯う云ふ入念の模範的石版は出來ない様になつて行つた。

十二

父が母と結婚したのは明治三年の春であつた。父は其時富岡社の禰宜であり、取締役と云ふものになつて居た。婚禮の式は乾也の指圖のもとに行はれた。鷺湖はもう病氣になつて居たので此式に臨むことが出來なかつた。伯父の帆雨は勘當されて居たから勿論出る譯に行かず、従つて下谷の實家からは誰も來なかつた。

明治七年に姉ゆき子は生れた。同九年父は住み馴れた深川を去つて居を下谷仲御徒士町に移

した。役所へ通勤するには幾分か近くなつた譯である。家は御徒町の通りから細い路次を入つた突當りで今下谷の電話交換局の在る所に位して居た。もと御坊主が住んで居た家ださうで、紙幣寮に出て居た青山と云ふ人から譲り受けた。随分古い家らしかつた。

乾也は發明家に藝術家を兼ねた天才ではあつたが、素行はやゝもすると常規を失し、處世に關しては寧ろ失敗者であつた。其山氣の爲めに累を石井家に及ぼし迷惑を父に與へたことも屢であつた。義理ある親としてこれに仕へた父は無理と知りつゝも乾也の言分を通させることが多かつた。而して自ら其犠牲となつた。

例へば維新の際大阪へ銀を買ひに行つた事なども乾也の大失敗の一つであつた。銀を買ふ可き手金として千兩の金を調達するのは實に容易なことではなかつた。成田山からの借用證書を擔保として三井から二三百兩を借りるとか、隣りの仙波から地代を十年分前借するとか、茶道具を仙波へ預けて數十兩借りるとか云ふ風に無理算段をしたのであつた。千兩の手金を打つた上横濱の西洋人を金主に頼んでもつと大きく銀を買ふ積りであつた處が二度目に上方へ行くと恰度鳥羽伏見の戦争となつて世は騒がしく、手金は其まゝ流れて結局虻蜂取らずの大失敗となつてしまつた。

明治四五年に工部省の命を受けて横須賀の窯で電信の碍子を焼くに當つても、其資本に充つ可く、石井の方の金を流用したし、其後高橋の袂の或屋敷跡に家賃十三圓の家を一軒借りて輸出の陶磁器の上繪を描くつもりであつたが、成績は一向に擧らず、半年も滞らせた家賃は石井の方で仕拂はなければならなかつた。此後始末の爲に石井家では本所一つ目の八幡御旅所の近くにあつた七軒ばかりの家作を賣らなければならなくなつた。

鷺湖が或夜深川へ來て乾也に意見して居たことがある。それは乾也が何處迄も純粹の陶工を以て立つ可きである云ふ説であつた。而して乾也の晩年は實に其説の通りになつた。其向島に移つたのは明治八年のことである。

乾也は二十二年の十月向島の長命寺境内で歿した。質が丈夫な人と見えて其放縱な生活にも拘らず六十九歳迄生きた。随分酒を飲んだ其報ひで死病も酒毒であつた。

父は向島の家の跡始末に困じたが、既に徵兵免れの爲めに三浦の養子と云ふ名義になつて居た母の弟の松次郎を其處へ住はせることにした。

十三

父は幼時鷺湖の教へを受けて日本畫を畫いたけれど、官吏の生活に入つては殆どそれに遠ざかつて居た。たまに人から頼まれて筆を執る場合も甚だ憶切であつた。

其頃の趣味は寧ろ洋風畫に傾いて居た。川村清雄氏が暫時印刷局に居たこともあり、エドアルド・キヨツネが御雇教師となつて居たこともあり、自ら其等の感化もあつたであらう。又其頃の同僚には下國熊之輔氏や本多忠保、齋藤知三など、云ふ洋畫の連中もあつた。而して局員の有志と圖り、公務の餘暇を利用して精研會と云ふ繪畫研究會を開いた。これは洋風畫ばかりに限らず、日本畫を出してもよいのであつたが、父は毎回洋風畫を出品した。其第一回は明治十七年の四月九段の革源樓と云ふに開かれ、第二回は同五月淺草の井生村樓に開かれた。會員には齋藤知三、本多忠保、下國熊之輔、平林探溟、杉山知正、細貝爲次郎、調所友次郎等の諸氏二十名ばかりがあつて、毎回批評者二名を擧げて出品を批評せしめる定めであつた。

第二回の時に父の出した賤夫執業の圖と云ふ水彩畫は寫眞によつて畫いたもので、其畫風はツングマンのに類して居る。此に挿む處の不忍池晩景の水畫は第三回の時に出したものである。

これは直接の寫生ではなく、寫生帖のスケッチを基礎として描き上げられたものである。其時の評が面白い。『斜陽水ニ映ジ、柳陰愈深シ。自ラ清涼ノ情ヲ起サシム。只點景人物頭部稍小ニシテ且淡シ。前程茂草甚ダ淡疎ニ過グルガ如シ。又天部淡墨ヲ和シテ刷スルハ甚ダ是ナラズ。宜シク輕淡ナル色彩ヲ擇ンテ施サバ如何』とある。

同じ年の八月には本多、佐波、益田、諸氏と日光に遊んだ。中禪寺湖の水畫は此時の所産である。それにしても寫生帖からの引伸ばしである。徹頭徹尾戶外で仕上げると云ふのは、父ばかりでなく、其頃のどんな畫家でも殆んどしなかつた事である。

其後猿、鶏、犬と云ふやうな畫題の課せられたことがある。六歳になつた私が父のモデルに選ばれた黒斑の犬と共に廣小路の寫真屋で撮影されたのも其時のことであつた。十三年に次姉のいと子が生れ、十五年に私が生れた。はじめての男のことゝて可なり可愛がられたらしい。また印刷局に於ける父の収入も其頃が一番よくて家は比較的樂に暮して居た。而して十七年に次男貞次が生れた。

『過眼隨寫』と題された十九年のスケッチブックを繰つて見ると觀古美術會で觀た古美術品の縮寫があり、また牛の寫生がある。其頃の印刷局の様子の偲ばれるのは篆刻する高田竹山氏と



り『れたの、も』

何か畫を描く下國熊之助氏とを併せて寫した一頁である。下國氏は鬚髯を生やして眼鏡をかけて居る。

十九年には彫刻科工手として彫刻科第四室長を兼務して居たが、二十年になつて二等技手に任せられ、大藏省以來再び本官となつた。併し判任官の定つた月給は却つて雇員時代のそれよりも少くなつた。

二十年の夏は齋藤本多等數氏と妙義山に遊んだ。妙義の奇勝についてはかねて鷺湖翁から聞かされて居たが、役所の勤めが忙しくて此時迄行くことが出来なかつた。鉛筆で手帳に即寫して來て、それを基礎として洋紙へ描き直したのが幾枚かあるが、それは洋畫と南

畫と混交した一種の畫風に於ける墨畫である。(挿畫)

『仙橋ヲ渡ラントシテ眩惑甚ダシク、脚慄キ身戰へ、遂ニ胎内潜リニ至ルコトヲ得ズ遺憾限リナシ』と其紀行文に書いた通り、父はさう云ふ場所に臨んで臆病であつたらしい。其臆病を私も其儘受繼いで居て、釣橋や斷崖には何時も僻易する方である。

三男の鶴三は此年に生れた。鶴三の名は父が恰度人から頼まれて三鶴の圖を書いて居たことに因んだものである。

十四

父は二十年の五月に龍池會の會員となつた。龍池會は日本美術協會の前身である。龍池會へ入つたのは印刷局の事業と關聯する處があるからであつた。而してそれが日本美術協會と改稱された翌二十一年には父が第一部の委員となり、其美術展覽會に劉阮天台の圖を出品して褒状を得た。明治になつてから公會に出品したのはこれが始めて、父の日本畫家としての生活もこれから始められたと云つてよいかと思ふ。

二十一年の十月、九鬼隆一氏を長官とする全國寶物取調委員の一行に隨つて近畿の社寺の寶

物を點檢したことは古美術に關する父の見聞を弘むるに最有効であつた。これは直接印刷局の事業と關聯する所が無いやうではあるが、美術品の寫真とか圖譜とか云ふもの、刊行の乏しかつた其頃としては圖案の資料を蒐めると云ふ意味から万更必要が無かつたとも曰へない。印刷局から出張を命ぜられたのは一等技手の内田萬次郎氏と父との二人であつた。其時取調委員の一行は恰度滋賀縣下を廻つて居たので父等はそれに附隨することになつた。委員の一行には川田剛、黒川真頼、山名貫義、小杉楡村と云ふ様な人が居り、之等の人々と既に相知る所から父は可なりの便宜を與へられたらしい。父は短い時間を利用して寶物のスケッチをしたり、また油墨で紋様を刷つたりした。

三井寺、竹生島など近江を歩いて京都へ歸り、奈良へ行き、大阪附近を觀て又奈良から吉野へ出で、それから尙京阪附近の諸地を歩いた。十月二十八日から翌二十二年二月十日まで滞在日數百六日に亘つて居る。父は此旅行によつて大分故實上の智識を得たし、また近江八景、吉野山、富士等の實景を觀て大に得る處があつた。

父は歴史畫に興味をもつやうになつて二十三年の第三回内國勸業博覽會には『豊公醍醐花見の圖』を出し、同年十一月美術協會へは『粟田真人圖』を出品し、其後二十四、二十五、二十

六の三年は課せられたる仁、勇、孝等の書題に従つて、『古公賣父』や『本多忠勝一言阪の圖』や、『重盛孝諫の圖』等を出品した。醍醐の花見は三等妙技賞を與へられたが、豊公の服装は其頃としては故實的に調べられて居る方であらう。粟田真人に對しては銀賞牌を與へられた。これには遠近法の智識が用ひられて前方に居る真人を大きく、後方の則天武后等は極めて小さく書かれた。芳年清親などの浮世繪は別として、懸物の畫に斯う云ふ和洋折衷を試みたのは其頃として珍しかつたに相違ない。

重盛諫言の圖は衣ころもの下の腹巻を隠す可く胸に手を置く清盛の前面を見せるのが普通であるけれども、父は清盛の坊主姿を背向きにして前方へ大きく出した。此僧形を畫くに際して父は態々上野の某寺の住持に乞ふて素絹を着て貰ひ寫生したのであつた。古公賣父の時なども車輛武具等に關して随分念入に調べたものである。

十五

父は其頃唯一の權威たる日本美術協會の幹部(繪畫の)となり、二十二年以降其審査員となつて居り、書名既に世に聞ゆるにも拘はらず、二十八年非職となる迄印刷局を辭することをしな

かつた。僅かな給料で、それ程面白くもない官吏生活に縛られて居たことは今日から考へると馬鹿らしい位である。物價の騰貴と反比例して父の月給は段々減じられて來た。今日では斯う云ふ不合理は到底許さる可くもないが、其頃としては印刷局の財政上止むを得ぬこととして諦めたものらしい。明治十五年頃は夜勤の手當を合して毎月七十餘圓を得て居たものが本官となつて六十圓から五十圓、つひには四十圓に迄下げられたのだから随分ひどい。それでははじめはほんの道樂に畫いて居た日本畫を斯うなつては内職として描くと云ふ必要が起つて居た。而して二十四年頃からは内職が追々増えて來た。

役所勤めを廢して畫家として立ちたいと云ふ志は疾に動いて居たに相違ないが、せめて恩給が出る頃までと我慢して居るものを、もう少しで恩給と云ふ所迄行つて非職にしてしまつた上官の所置を父は快く思はなかつたであらう。なんでも其當時の父は一寸途方に暮れて居たやうに小供ながら覺えて居る。

それは無理もない。當時の美術界は決して今日のやうに景氣のいゝものではなかつた。畫の依頼丈で果してこれだけの家族を養ふに足りやうかと父の心配したのも尤ではあつた。永年の月給生活に馴れては収入の不定が第一に氣遣はれた筈である。それだから、父は役所の人の勸

めに任せて、中學に居た私を半途で退學させ、二十八年の二月から印刷局へ彫版の見習生に出して、些かながら家計の補ひを得やうとした。

けれども案ずるより生むが安く、交友の廣い父は到る處に同情者を見出して、引續いた畫の依頼を受け、印刷局に居たときと同じ位、若しくはそれ以上の月收を得ることは決して困難ではなかつた。さうなつてはじめて、もつと早く役所を退けばよかつたと後悔したのであらう。

何分にも専門家として立つてから三年にもならず死んでしまつたのであるから、父の畫と云ふものはそれ程數が無い譯である。家に残つて居る主なる畫としては二十九年の末に伊太利の美術博覽會へ出す可く畫いた秋野小禽の圖があるに過ぎぬ。これは文晁あたりの此種の畫にヒントを得たやうであるが、楹紅葉や小禽などは自身の寫生に基いて居る。

父の畫は鷺湖の風を傳へて居る點もあるが、洋畫の取入れられたりして自ら特殊の混体を成して居る。概して色彩の濃くなり過ぎて、諧和を失するやうな傾向を有つて居るが、晩年の『苔徑月歸牧』(二十七年の美術協會出品、銅賞)や『耕織圖』、『蘆雁』(二十九年同會出品特別賞)等になつては次第に調子もよくなつて行つた。

父の畫と宮内省とは割合に關係が多かつた。二十二年の春美術協會へ聖上の臨幸に際しては

御席畫を勤め、其年の出品『桃花流水圖』は宮内省御用となつた。二十三年の春は東宮職からの御注文によつて『楠公笠置の行在處に赴くの圖』(此圖は容齊のに倣つた)を畫いたし、其年の秋は協會で皇太后陛下の前に御席畫をした。二十五年の春は皇太子殿下の前に御席畫(養老孝子圖)をなし、其年の秋の出品『本多忠勝の圖』も亦東宮職の御用品となつた。二十八年の秋協會へ出した『妙義山遠望圖』(銅牌)は翌年の『耕織圖』と共に宮内省御用品となり、二十九年秋皇后陛下の行啓に際して御席畫をなした。

二十九年の五月は鷺湖の二十七回忌に相當したものであるから父は江東中村樓に追善書畫會を催し、諸方から借集められた遺墨七十餘點を展観した。杉田幸五郎氏所藏の『蜀棧道』、『琵琶行』杉田恕輔氏藏の『羅浮仙』等の代表的の諸作も列べられた。此會は一つには父の名廣めの意味をも帯びて居た。友人と相會して書畫に一日を樂むと云ふやうな意味の書畫會は今既に跡を絶つて居るが、此時のなどはまださう云ふ意味が残つて居た。而して交友等は單なる御義理でなく眞の興味をもつて出席して呉れた。大槻如電氏の紹介によつて合田氏の平家琵琶が彈せられまた別席には乾也一門の席焼があり、村上委山氏が門下の令嬢達を具して茶席を擔當して呉れると云ふ風に數々の興を添ゆるものがあつて、此會は頗る盛大を極めた。これも其時來て居た

村田丹陵氏が父に向つて『ごうも君の人望には驚いた』と曰つて居た。父親の二十七回忌をし
た其翌年に早くも世を辭するやうにならうとは、父自身でも想ひ及ばなかつたに相違ない。

非職になつた其年にはまだ店出しをしたばかりの事とて仕事の選り好みをするやうな餘祐は
なく、人に頼まれて輸出畫の花鳥の大圖を畫いた。其原圖だけを父と故梶田半古とが描いて數
名の助手にそれを複寫させたのであつたが、百六十枚の畫料が百九十二圓とは今から考へると
嘘のやうな話である。廣い處でなければ出來ないので淺草松葉町の松葉館と云ふの、二階を借
りて畫いた。また同じ年の九月は千葉町と上總の八幡とに旅して揮毫の依頼を受け、其十二月
には招かれて茨城縣下北相馬の小文馬村と云ふ處に遊んだ。これ等の地方には父の畫が遺つて
居る筈である。

十六

父の知友はよく私に向つて鼎湖さんは面白い方でしたと云ふ。友人に對しては駄洒落を曰つ
たり何かして如何にも機嫌のよい人であつたと見える。併し外では何時も快晴のやうに見えて
居たかも知れないが、内に在つては必ずしもさうでなかつた。随分曇天が續いたり雷が鳴つた

りした。外で受けた不満を内に於て漏らすと云ふ様な處があつた。

例へば或時開運堂と云ふ書畫屋のやうな男が畫家番附を父の留守へ置いて行つたのを歸つて
來て一覽して、自分の名が四條派と云ふ部へ入れられて居るのを知ると、忽ちにひどく怒つて
周圍のものに當り散らし、傍にあつた煙草盆を庭に投げつけて、『俺を四條派とは何だ』と、大
に開運堂を罵つた。四條派と記されていゝ氣持はしなかつたに相違ないが、其時は他に何か不
満のことがあつて、それが此きつかけを得て破裂したものかも知れぬ。

印刷局から歸つて來て座敷へ仰のけに寝ころんでデーム、ゴツデーム ("Damn" "God Damn
You" 等) と云ふやうな咀ひの言葉を連呼して居ることも屢あつたが、さう云ふことが役所を退
いてからは無くなつたのを見ても、役所には嫌なことが多かつたに違ひない。

肝癢は鷺湖から遺傳したのであらう。畫を描いて居る間も調子よく行かないと云つては随分
焦れて、或時は半ば迄進行した畫を引裂かうとしたこともあつた。我々子供達も悪戯をしてよ
く叱られた。父は恐いものとして成る可く近寄らないやうにする風さへあつた。社交は寧ろ旨
い方で人と衝突する事などは滅多に無かつた。たゞ一度或書畫會の席で川邊御楯が父を指して
『日本美術協會の間牒だ』と言つたとかで流石の父も憤慨して、『間牒とは何だ』と詰め寄つた、

中に入るものがあつて無事に済んだが、一時は鐵拳も飛びかねまじき勢であつたと云ふ。

父は他と會合することが嫌ひでなかつたと見えて、印刷局に居る間でも、力めて美術協會の月次研究會へ出たり、また其創立頃から關係のあつた明治美術會の評議會へも殆ど缺かさず出席して居た。それから文墨協會の評議員兼幹事となつて居た。美術協會に最親近して、協會に對して極めて忠實であつたが、黨派的の偏見は持たず、村田丹陵、寺崎廣業等諸氏が青年繪畫共進會の旗幟を樹てたに對しても始めから好意を表して居た。

高田竹山氏等と雑誌『東洋美術』を刊行して、其挿畫を自らも描き、また人に頼む等のことに勞力を惜まず、寧ろ興味をもつて居たやうである。而して挿畫とか版下とか云ふものを輕視することなく、可なり眞面目に謹んで筆を執つた。其頃の大家を網羅した大倉書店發行の『繪畫帖』と云ふのは僅か二冊しか出なかつたが、あの挿畫にも相當骨を折つて居た。父は圖案にも興味をもつて、蘆手歌繪の圖案を漆工會へ出して賞を貰つたこともあつた。

父は可なり酒が好きであつた。徳利が出て來ると既に酔つたやうな氣分になつて居たと父の知友等は曰ふ。家では晩酌をやりながら機嫌よく話をする位のことであつたが、他處では興に乗じて踊り出すこともあつたと云ふ。併し其酒量はあまり大きい方でもなかつた。



死病の肝臓癌腫は運命と諦める外はなかつたが、或は酒の爲めに多少死期が早められたかも知れぬ。三十年の初夏の頃である、始めは胃が悪いとのみ思つて朝不忍池畔を運動したり何かして居たが、それは段々に悪い方向に向つて、家族は其治し難き病なることを醫師から明かされて驚いた。重態になつて全身が黄ばんで、横臥することを得ず、よりかゝつて居る間は他^{ほか}からも實に苦しうに見えた。併し其年十一月二日の臨終に至るまで父は死を豫期しなかつたらしい。而して其臨終の瞬間でも安心を得なかつたらうと思へば實に氣の毒である。

長女のゆき子は既に廿五年に工學士の瀧村竹男氏へ嫁して居たが、次女のいと子、斯く云ふ私、次男の貞次、三男鶴三、四男四郎(廿二年生)三女みつ子(廿五年生)四女幸子(廿七年生)と云ふ、十八を頭に四歳迄、七人の小供の行末や、其等を養育して行かねばならぬ母の苦勞や、資産どころか僅かの借錢より外に遺すものゝないことや、業半ばにして逝くことの無念さや、之等が若し瞬時的に其腦裡を過ぎつたとするならば、父は安心して往生出来なかつた筈である。

併し後に残つた母の勞苦と親類の援助とによつて、同胞は末女の幸子の天死せる外無事に生ひ立つて、今皆一本立ちとなつて居る。而して私は今こゝにいさゝか父祖の業蹟を傳へることの出来たのを幸とする。

鶯湖繪日記抄

(安政六年六月より八月に至る)

六月朔日 晴

早朝辻店ヨリ氷室ヲクル。近邊へくばる。會津産相田稻湖のづらしがる。

昨夜廣小路にて八丈産ナゴ蘭カウ。百文。高イ。

夕方稻湖の親父大病ノ手紙來ル。稻湖は云ふに不及、皆々おどろく。直に六軒堀の宿へ行、則左の如し。(齋あり)

三浦え行。雨村來り泊る。印三つ頼ム。小印禮に品物上ル。二顆の内禮に貳朱上置。

二日 晴

朝雨村より長者町結城君え行。午後白山の柳亭君娘さんを連來入門。手本上ル。年十三。

豊彦門人ケンキとやら來。

稻湖又來る。めり安かけてもの云。小兒ら笑ふ。連れて吉原芝居淺草邊見物させ、並木別る、時鳴。

仙人指甲蘭 淺草半三郎ニ而見る。

信州中野喜代太郎來。三都合作見せる。面白し。扇子四本、半折一片遺ス。有難ガル。

三日 晴

鼎湖忍川にて得たり。(魚の寫生)

畑中三五郎君來。桃下さる。醫者片岡先生來ル。雲津先生丸扇下さる。難有々々。三浦え同道。雄三浦と歸る。

金子泰輔兄の老母來。用事はなし。

先月中旬松浦先生蝦夷カシユツブ五本被下。

柳塢君より二日夜贈る。(本直酒の瓶の畫)

四日 晴

大沼、友澤、莊野、嵩、川島の諸家へ行。

關氏立。片岡君手傳。信州河源子來ル。みそ漬焼酒被下。

雨村雅兄與於神田明神社地就新涼。散半杖頭錢。

せみ鳴や鯨まくらの置どころ

先生笠を大沼にわすれし也。かさをかりて歸る。坡公の竹笠ぼくりを思ひ出し少々興あり。

又謝安石の曲笠を學びて我心を直くにせんとおもふ。

五日 晴

益池了順さま。馬齒莧一名五行草。花黃、實黒、葉青、莖赤、根白、故以爲名。時珍之說。

スベリヒユ、此草水銀を出スト云。

宋ノ陳仁玉ノ菌譜ニ出ヅ。螢火芝。俗ニ天狗タケト云。毒あり。(畫)

蘭洲先生來。凌澤の歸國を咄す。

蕉翁來。名護蘭鑑定。信州河源の頼み貳枚出來。

夜後竹亭君三種を被下。矢掛土産ゆべし(畫)と丹後産花まさご等。

六日 雨

早朝結城君え行。三浦兄に逢。共に竹亭に登り歸る。鼎湖病。

七日 雲

松浦先生畑中君來。長山先生増見屋小僧來。

八日 雨

朝セメンシイナ買に行。紀の國屋にて壹兩目百疋也。三分代壹分貳朱。御成道にて朱泥の鉢

壹歩づゝにて貳つ買。安イ。
ウエイステーション
酒 石 酸 火 酒 砂 糖

吉川老翁來。咄色々あり。宮尾老兄榎華老人の帖持來。先生是を知る。老兄おごろく。問經堂隸帖。榎華溪又榎華老人錢名泳。我れと井を同じくする安藤君の少女お直さんとやらんの歌うたうをきくに、面聲ともに美なりければ

これはまあいつ開そむや花の苗

或やも女年なども似合さる少年を戀慕してかけ言云ふておりけるときに隣にて其美少年の咄聲聞ければ、

噂した初音をきくやほゝぎす

九 日 晴

早朝三浦え行。お兼さん事出來。留守へ結城君來ル。酒札一片被下難有。

十 日 半雨

早朝結城君へ行。午後君亦來ル。貞の事成ル。夜鳶峰兄來ル。

十一 日 晴

午前三浦龍壽翁金貳兩持來。午後深川山岡様内松浦行。鈴木平三郎へ寄る。夜扇面亭より扇持歸。

十二 日 晴

朝三浦行。

石案得取。久助外二人に而オモシ。金五兩もスル物のよふに久助はなしけり。留守に結城君貞次郎の結納物持來。

目録	一 帷子地	壹 反
	一 袴地	壹 反
	一金子	五百疋
	以上	

午時駒込山下君へ初帯ニヨバレ、菊潭同道にて參る。菅沼君へまはり、快々亭にて納涼夕方歸る。又結城君へ行。蓮と萩を贈る。甚よろこぶ。君九州の船のものゝ事を話しけり。先年備前の國下津井と申湊に泊せし時船のもの夫婦のけんくわをきゝしに、

婦の曰お前は馬鹿々々しき人なり。數日風波悪しく、今日沖にてよふく一大魚を得しに、米其外にはせず、酒にするはなんぞ、夫曰數日無漁よふく一魚を得たり。是を酒にせずし

て外のものにする時は我命あやうし。命あらば明日漁はある可しとて酒樽を枕にして醉眠せしとぞ。實に片舟を世界とせし一身輕し。

楓葉蘆花並客舟。烟波江上使人愁。勸君更盡一杯酒。昨日少年今白頭。
自家臺陽道人亦是也。

十三日 晴

朝、仲町にてたんす買。貳分三朱。松坂屋來。羽織袴じゆばんかたびら頼む。能坂先生來。先生甚老たり。畫絹貳片。長崎煙草貳玉。からふと玉二つ被下、有かたし。合作認上る。竹亭主人の觀音認。日中は今年始めての暑。先生極つらかる。

細川家臣成瀬君來。朝鮮俗國産煙草被下。畫三枚頼む。貳尺三寸は長落款の山水人物。貳尺は瀧のある山水人物。ヌメは合作。今夜明月の下に畫、かつスヨ醉。

十四日 晴

神通先生來。駿州藤枝より北方四里斗先に青羽根山といふあり。其ふもとに玉石を出す。且其山より一里斗さりて玉取村と云ふ有て玉傳寺と云ふ禪宗の庵室の境内に玉を祭れる小祠あり。



諸印湖寫

り。其祭れる玉も此類の勝れたるものならむ。

神通翁璞を雄に贈る。記は則翁の書なり。

十三日夜鳳竹買。三十二文。歸後窓紙にうつし樂む。これにて元はとり、あとは只なり。我多年此小湖石を藏せり。今夜この竹に添て一雙となす。

午前雪信兄來。須源來。瀧の畫頼ム。外に唐紙三枚枕山兄へ。夜枕兄行。

十五日 晴

細川君來。宮下、山下兩先生來。唐紙四片頼ム。

越後柏崎人飯塚次郎吉君來。謝義百疋持來。

十六日、十七日、十八日、無事。十九日、酒井兄來。

二十日

珠津兄より貳百疋目錄菊潭へ壹片被下。

辻たん來、笠翁作一團和氣香爐被下。有難。

柳塙兄と三浦へ行。三浦雨村と同じく入谷辻氏へ行、月をふんで歸る。

廿一日 無事。

廿二日 夕立

須源來。鼎湖へ貳朱祝義被下。松坂屋來る。小判を一兩一步の通用にて遣す。

廿三日 晴

早朝結城君來ル。鼎湖へ上下被下。須源來。壱湖へ足袋手拭被下。夕方鼎湖同道結城君へ行。種々御ちそう。御新造より三品被下。紙入、書簡袋、小菊三つ也。

廿四日 朝雲午後晴

早朝鼎湖同道所々あるく。嵩にてすて吞すこ酔。

西村先生から小柄被下難有。長太來。手拭ヲクレ。

廿五日 晴

鼎湖三浦へ引移る。

廿六日 晴

結城君へ行。

廿七日 晴

廿八日 晴夕方雨

廿九日 雨

やむと共に松浦へ行き萬八へ寄る。松のすしにて吞。

晦 日 雨

七月朔 雨

越後元藏より○ありがたし。

二 日 雲

三日 雨 四日 雨 五日 雲

六 日

午後晴。三浦へ行。結納調。

七 日 晴

戸塚香雨兄來ル國産ありがたし。三浦鼎湖同道にて坐。夜珠津と長太へ行。

八 日 朝雨

早朝あべ閑堂先生來ル。本所横網神保佐平様御子さん方入門。

夕方本所横綱神保佐平様へ行。

七日夜珠津與不忍池長太にすこ呑。月下蓮花を見て

清き蓮に照そふ月のひかりかな

九日 晴

波山兄へ行。びん多外ニ酒もすこ呑。兄同道にて歸宅。

十日 晴

雲津兄來。同道にて三浦へ行。

十一日 晴 十二日 大風雨

十三日 晴

おかねさん引越。

十四日 晴

佐藤善吉さん佐度五十里町土屋辰藏入門目錄取次、外に謝義五百疋被下。

十五日

結城君、乾もおばさん鼎湖來ル。蔦峰、馬喰町一人、葉山、西村君、珠津、菊潭、たけ同道

にて快々亭に遊ぶ。歸後大沼行。

十六日 朝晴夕立甚し。

お濱御殿奉行小林君へ行。

十七日 晴

十八日 晴

深川松浦へ行く。吉六老人同道なり。月齋兄會に寄る。松のすしにて呑。

十九日 晴 二十日 晴 二十一日 晴 二十二日 雨 二十三日 雨 二十四日

雨 二十五日 大雨 二十七日 晴 二十八日 晴 二十九日 晴

八月朔 晴 二日 晴 三日 晴 四日 晴

五日 晴

細川成瀬君來。蘭亭頼ム。國産キノコ茶被下難有。

八王子川本先生三尺巾三枚頼ム。内一分受取。あとは十二日に送る筈なり。三紅圖成。成島喜又君頼み。

六日 晴

午前梅花上人來。咄し此圖に及。牛は國清寺の前住の再生なりとぞ。(牧童と牛の畫)

八 日 晴

三浦兄仙臺へ行。

葉山歸國。

昨夜我古に戯歌を作れとて壽留女と茄子を題に出しければ、酔後かくよみけり。

國に歸れば女房するめはやくやゝでももなすである。

鶯湖繪日記抄

(文久二年五月三日より
同年六月十一日に至る)

五月三日

ひめ藤花さく (ひめ藤寫生畫)

富永氏來る。粉本十二片かし候。

藤山君の瀧の畫認む。

生涯草々硯爲田。到處身隨即畫禪。紙上功名遺後世。胸中山壑得先天。

一生守拙能知命。半百甘貧誰可憐。回首舊遊都是夢。京華旅食幾經年。

張立本之詩也。

一庭魯文芳春三兄來る。三泉又來る所へ茶菓遣す。晚、杉、龍、采の三兄と柳川に飲む。樓
主一皿の魚を給はる。好物。持て歸る。

葉山兄來りうらの大根はたけを舞。其真如斯。(畫)

かし本やたは羅屋なる者ことくの入門。

亭主ことく、ことくのむしはおかしなむしで、夜中ごろにはツウ、ン穴え行くどむつく

り歸るところ、亭主ことくひよこひよい。先生傳じゆのすがた。(書入)
端 四 半雨

渡邊茂三郎來。新茄子を給はる。(茄子の書)

午、大菜根え行飲。観音歸。織田様かしは下さる。駒込富永君兄妹來る。(書入)

五 日

梅村君來。達師鑑定。(達摩の書)

小林先生來飲。又先生と先生え行大飲。夜田村君來る。

六 日 晴

大菜根と人魚を見に行。大ふてき物あされる。

定八老人來。鑑定四五幅。皆々あし。

楓紅先生來り全紙五片。謝二分。早速認め。上州半四郎殿、萬佐殿來る。頼み物色々。謝一分。

玉寶堂來る。全紙十二枚。謝一〇十三日ころ迄。

池の端がん齊先生來。書物はたる。佐のや玄六殿使來る。書物遣す。



部一の記日繪湖鷺

夜大の神さま来る。

七日

伊三郎殿來扇子(畫)頼む。十三日ころまで。

午、芳春の會え行。兩國柳屋なり。歸路淺草花園にて柳圃、林齊、兩兄と飲。艸に立に句を書、艸に弓してチョン／＼弓してチョン／＼の花の眞をうつし繪。(菫蕪の花の寫生)

八日 晴

ますみや拂 四兩一分一朱也

大の來る。靜海堂主人上京を祝すとて余をしてからたちの一枝を畫せ、并代作。

海原やたしかに薫る松の風

余亦

大人はけふからたち初めて君の守護つとめてきこくする身なりけり (からたちの畫)

九日

上缺……………清凌亭に大飲。谷中芋阪茶店に午睡。三泉兄を訪。土産として二分遣。庭前の豆其外にて飲。葉山兄を訪、茶を飲。又四人同行。鶯春亭に飲。歸宅。太古菜根と又々飲。

兩兄異國きぬ一疋つゝ持歸。(書)

十日 雨

田中玄彰先生來。三分給はる。先生の分三尺幅にて、(瀑布の畫)梅松竹、山水、全紙松鶴、二十日限。甲州、油藤來。

十一日 半雨

曲川來飲。山太古兄來。桂洲兄來。大印え行和飲。三泉兄來二分給はる。夜里村兄來飲。大印亦來。

弘文堂來。扇十五本頼ム。謝三小角。

田中先生の大瀑布成 (書)

十二日

根岸の里にてほとゝきすを聞て

□□□□わか葉まじりのしつの戸は軒端間近く啼蜀魂 (甚太郎自書)

午、川越の甚太郎先生來。右の書をなし飲。

夕、大菜根の悴門出に招かれて大飲。

十三日 大雨

客の來るなし。竹酔日なればとて獨り大飲。晚、種々の客來。吞、醉、眠。

十四日 晴

吉田の小野や殿來る。頼みの書出來遣す。

牧野河内守内川手太左衛門來り、きん二被下。ありかたし。君と飲。

上總九十九里倉海先生 干物(書) 下さるなま干なり、極うまし。ありかたし。飲。(畫のそばに

「木の葉にあらず、したひらめの干魚なり」と註)

午より杉、龍とますみや直印と四人にて堀切へ行。菖蒲(書)花盛り極よし。歸路穴にて飲。

なます極うまし。梅じゆんさん、油藤、清戸の三人留守に來る。晚歸宅又吞大醉。

十六日 晴

杉と小林君へ行。水盤(書)かりて歸る。

十七日 午

鈴木先生に賈物を見あらはされて

繪のことは素人芝居五段目の獅子猪より後に放す鐵砲咄 (執心藏の假名垣 魯)

深川三州樓上の曉に茶やのむかひ未來らず折から時鳥を聞て

物かはの藏人おそしほとゝきす (以上香文自筆)

奥村裕齋先生來。

關口痴常先生來。書箋紙山水二枚、唐紙二片頼ム。謝一兩二分。

波山來り、音彦先生來。

要右衛門先醒來。肴札被下ありかたし。

晚、山太古翁へ行、祝新居。酒肴を贈る。

雪花を昨日今日とそ思ひしに山ほとゝきす來て鳴すきる

十八日

下總深輪村痴常先生來。手製茶下さる。味好。□□當月中と申こと也。

丁子あはや書到來。種々頼み物。謝一〇下さる。

西川岸須鐵兄來。□□秋山君の頼み物取次。

ことゝの先生來る。寫山樓五節句持參。

曲川來。靈芝(畫)持參。

大の神さまつくだに下さる。

大師へ行。七艸を買ふ。百五十文。高し。

十九日 晴

里村君來。ことゝ來。介石翁の幅持參。縮圖。題詩曰。

山下雲連山上。溪西水接溪東。舟渡白鷗飛處。人行綠樹陰中。

介石陳人寫口 (畫)

遠善芝外二人連來。そばきの糸下さる。ありがたし。扇子四五本認め遣す。

舟はし榮治郎來泊。煙草下さる。

岩片音太郎様來。寫山五幅よめ入。

二十日 未明

榮治と池の端を歩行してほとゝきすをきかんとてきかず。

ほとゝきすかたちのみかは一聲も聞かぬこそなをあかぬなりけれ 榮 治

二十一日 晴

友と清凌亭にて午飯。

岩瀬先生來。茶下さる。菊黄白壹片。達摩一。ともに全唐紙。謝一分。月末迄の約束也。片岡先生來。

二十二日 晴

椿村關口要右衛門殿來り、山水一、達摩一、頼む。來月初迄。謝五百疋下さる。午、田房へ行。良寛をかりて歸る。大菜根より玄鳥つれて歸る。

二十三日 晴

四ヶ市湯屋主人來る。屏風片間頼む。謝千疋。スナゴ貳百枚まくよし代料アトカラ。模様玉堂富貴か四季花。

晩、萬佐へ行。越後中の島星野氏に逢。送られて歸る。

二十四日 半雨

晴雲樓にて主人杉陰及一庭など四人で、こたつで、飲んで、雪を見て、酔て、書て、しやれて暮らして、こは早春のことなりしが、丁子墨雨老人の應需て書送る。(小點を畫く我古と杉陰等との略畫あり、挿畫)

二十五日

北越中の島星野十郎右衛門殿來る。二兩給はる。同理右衛門殿來る。山水六片頼む。謝一〇

高抄(砂?)屋來。頼む物出來。謝一兩。

白山柳亭君たかな給はる。ありかたし。

二十六日

長太郎來。蓮葉のまつくれる。一庭老人來。キス下さる。

二十七日 半雨

林齋先生來。さどふ下さる。萬佐忝加藤佐吉入門。尺巾三幅對三通り。尺五幅三幅。きぬか

く一面。右は三人にて頼む。甲州中小河原村縫藏殿。上州本宿半四郎殿。萬屋佐兵衛殿。

田房翁來る。

矢崎君が官を祝すこと。(富士の畫あり)

ますみや拂ひ十六兩一步貳朱なり。甚なんぎ。

二十八日 雨

無事。池の端隠居一庭子同道。

二十九日 半雨

柳圃兄來。一庭十同道。大好物のうとんち走になる。山太古兄來る。南無三寶荒神様。(松の畫あり)

五月二日(閏) 雨

里村君壬五月の掛扇になんぞ書けとありければ此圖を書きて并題我古山人
梅雨に潤ふて長し田植うた。(田植の畫)

ボンス賣所八丁堀桃井新左衛門の近邊水菓子也

三 日 雨

石亭先生來。大山水頼む。謝二兩。田澤へ行。

□英泛流水。 點々如瓢霞。 爲有
□津者。 不敢種桃花。 瑞 圖 □

此幅字二字かけたるを補はんとて何と言字なりとありければ落、問の字なるべしと言ふて返しけり。

朔日夜山太古兄にて甲子祭り豆飯下さる。をりふし近隣より秋田ふきの葉を一片大黒天へ奉る。其葉巨大二尺ほどあり。余に歌よみ祝せよとありければ、

招か壽と富は自然にきのえ子よ。ふきを富貴ともうし祝は

仙翁倚杖と題す (傍に竹にて支へたる草花の畫)

四 日 雨

柳川へ行。一庭子より書一卷下さる。松園先生來。謝三兩給はる。中村君全紙袋戸頼む。謝一分片。三泉兄來。仙傳を用立。

五 日 皆晴

午、田澤とひやむぎへ行く。ち走になる、氣のごく。
柳亭君來る。かん柳しやに山水頼む。謝二兩下さる。
ますみやより異國しや壹疋贈る。代皆濟。

七 日 風雨

中村君來。種々認め物頼む。謝二〇。弘文堂來。合作扇二十本頼む。謝分片。
我古夢に蝶となりせはす田上野けふもあすかどめぐりあそばむ (下に我古像の畫あり)
一庭兄此幅を持來。我が筆なれ書ける覺なし。

八 日 少雨

曲川來る。足利抄榮兄萬古急須下さる。秋山君謝五百疋下さる。

幸助先生來る。大山水持歸る。紙料共謝三分片。
上州半四郎先生來る。遠善さん來る。

九日 雨

柳圃兄と長太郎へ行。寒松堂にて茶を呑。

十日 少雨

辻文さん松洞兄一庭子來る。

十一、十二、十三、十四、無事。

十五日

畫龍昇天。十五日此圖作る。島田金四郎入門。

十六日 雨

橘陰先生來。中村君多賀城古瓦給はる。

十八日 雨

十九日 半雨

石井一庭兄の作齒の業に妙を得しにかんして此圖を畫并戲題 我古山人

落齒せし身にも再びはを生し花をさかすることもありなん (花咲草の畫あり)

落齒せし身にも再びおふしたて花をさかすることもありけり

二十日 雨

森川釘太郎殿入門。晚一庭兄へ行。大ちそふになる。

廿一日 晴

王白石先生來。

廿二日 晴

淺草廣小路の人鏡翁の幅持參。眞蹟と申遣す。

永知兄外一人、山太古兄關姉さん來。

廿三日 雨天

廿五日 半雨

根岸へ行、花を得て歸、樂し。晴雲軒へ行。此幅を得たり。

世の中を樂にへまひしよ入道あればそのぶんなけりやそのぶん (へまムシヨ入道の畫)
近衛太郎姫正筆。信尹公息女なり。林良の幅を得。價もつとも高し。

廿六日 半雨

王白石兄來。花を澤山下さる。もつともありかたし。半四郎翁并星野理右衛門殿來る。山太古兄來。

五侯貴門脚不到。數寸硯田身自耕。我古山人并題 (下に湯染の山水あり)

松浦多氣志郎先生に湯染傳法

廿七日 夕雨

西河岸へ行。喜三郎殿と箱崎曲川の新居見舞。

廿九日 雨

一庭兄と仙果翁を訪。不逢。晴雲軒から金印へ行。

晦 日 晴

大師にて六月の花得たり (花の畫)

六月初一日 半雨

小森君尺巾一幅頼む。幸手野村慈之輔君全紙四片袋戸四枚。謝一〇二分片。

二 日 小雨

一庭兄と井へ行。うまし。

閏五月二十五日頃より數度天より實を降らすと云ふて、其ふる地は御城内を初め下谷根岸の邊本所深川芝築地邊都下一般にあらず。其實細文あるあり、灰色なるあり、是何物なるや確定せず。或云楠の實、或云菩提樹或口玉の實、諸説紛々として一定せず。上野多寶塔の前大樹あり、山王山にもありと云ふ山楠と云ふもの、實のよしなり。多氣志樓主人のはなしなり。又物産方田中芳男、鶴田清二郎の記も見えたり。柳氏の眞寫も見あたり傳摹す(下に此の實の圖あり)余十二歳の頃も此實ふれり。植置きしに生じたるを見るにうら白と云ふ木に似て(以下缺)其實初綠色熟するに従ひ黒色となり、外皮を去れば灰斑あり。

六 日 雨

七 日 少雨

するが臺邊本郷田澤へ行。全魁の書を得て歸る。

八 日 小雨

一庭兄來。黄槿花給はる。原十右衛門君來る。晚高柳君來る。

九 日 雨

好山好水恒相對。浮利浮名不願爭。 半江

十日雨

雨風猶見節。醉筆却來神。

十一日晴

菊清さんの求に應書。

無事たゞく鐘の音冴えて星さびし

我古山人

鷺湖文藻

若も此子が書かきの子なら、蘭や竹からならはせて、ぼつ／＼三年くま八年、寫し物には骨おらせ、芥子園だの佩文齋、書畫會づらも廣くなり、番附毎にのせられる、遊歴毎に損もせず、そろ／＼レコ(天狗の畫)になります。

鳥渡一ぶく上りなましど、すい付煙草のゑのはしわたしに、火のやうになさんした、今はくびたけほれました。たばこのけむはいやざます、遠くなるほど薄くなる。おつ／＼けふうふとなるからは、させる衣物もいらぬからばつばと暮すがわしや嬉し。

玉薬用ひやうこそ大事なれど大切なる國のわづらひ

日本をさしてきたアメリカカビともみなみを思ひ歸りけるかな

毛唐人なごゝ茶にして上喜撰うかされてこそ眠られもせず

花守がひるねの夢の魂ならん手折し花を追ひ來る蝶

内藤君夫婦若君の三有卦を祝してよめどあり

ふゝゝゝ婦ゝゝゝ夫ゝゝゝお多福のふく火ふき竹かな

茶代多けりや急須の茶をも、入替るやら口茶やら、菓子はやき芋よしにして、ようかんかすてらそばまんじう、茶わんはしん渡の異國焼、はしはさいばしよしにして、しなぬの國に名も高き、これは穂野のゝすゝきばし。

醒て飲酔て眠るの句をなして今日か日までも待かおかしさ

生前一杯酒

一躰吾は二十ころ道を學んで、三十で妻子もありて、^{死後}四五の名の心にかゝり、六法の奥を極めんと、七難や八苦の厭なけれども、百迄命保たねば千辛万苦今こゝでつくして後の露の名を待一杯の酒にこゝろをとめよかし、のめば空々寂々の身は



花のもとに落ちし翠のかんざしはさしこむ癩のたねとなりけり

むらさきのもりに棟花アツチの咲きにけり

幾つぬれば餅飯喰ふそたらちねに問しこゝろの春は來にけり
かせぎさへすれば寶をつかみとりわし獨りではない誰れも彼も

壬戌朔酉の未明の吟

初午や獨り呑んでも酒はさけ、肴も無くて今日もよつたり

繪は位なり、いなりさまだよ、馬鹿さにやならぬ、衣ふくそなれば謝義うすし

影法師影法師月と汝と吾意の如きは三人のみ

くむ酒を我手につくもいとほねど、させど呑ぬはうき夜なりけり
吾によく随ふものは汝のみ、酒の通ひに頼まれはせず

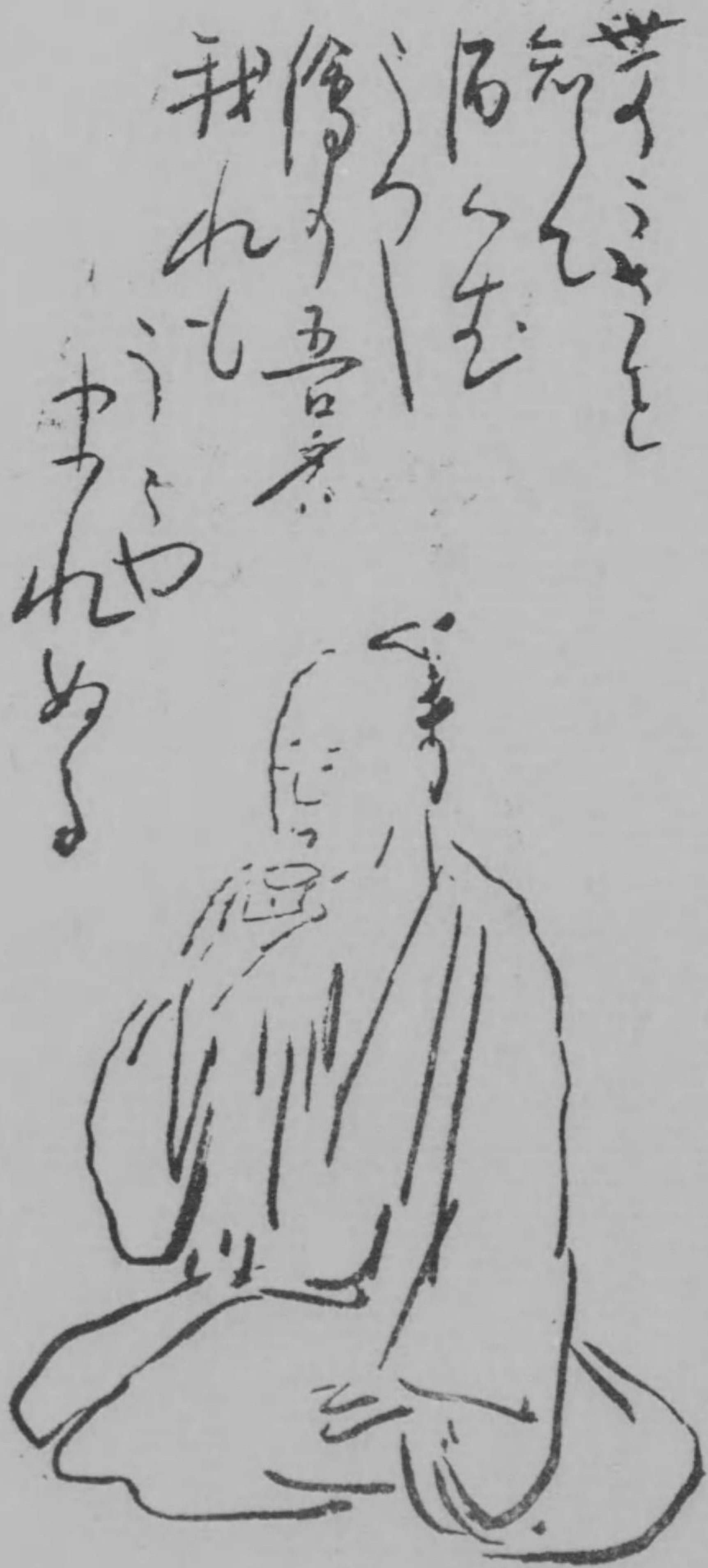
お前なら花あるとこに往田川(蝶の書)
我魂のそなたならばすだ上野今日もあすかどめぐりあそばん

さく里のてふ遊ひめ盛をよめる
花を賣のするしに植るさくらかな
お見なんし門の柳もみどりかな

註曰 翠は花のかひろなりけり

文久辛の酉のとし彌生のなかには廓の花を見けるにはや花は
ちりぬるに、紫てふ遊ひ女の盛をよめとありければ
寫し繪の此糸櫻とことには盛久しき花にそありける

上々も世をぞ憂ふる時なれば今日一日もあだにおくらじ



思ふとも及ばぬ身にはなかくにおのれくのなる事をせん
好き道をなりはひとする吾なれば昨日も今日もたのしみの世や

自像に題す

世のうさを知らで酒くむうつし繪の吾身は我れもうらやまれぬる

荻菅蔣三草筆の真寫に添えて

荻は北總小川邊に多く有とて霞外翁の贈る。菅相州小田原にありとて友人月
齊子のたまもの、蔣は白毛を染る具なりとて秋婆見せけるを寫す

すて置かば野くさともにくちぬ可し、子にをしへたる親をしらめや

菅神を筆のひじりと崇むればその草にまでこのすがたあり

筆に似て内に墨ありまこも草あな面白のかみを染むとは

老弟子静好堂の主が雷木をもて作れる人の守刀に讚す

人の口と物見の亭は戸がたゝず、摺鉢に蓋がなく雷木に鞘のないはどつとむかし神代からの御
定り、人の口や物見るちに戸がたゝずとも汝が主は身に戸さす常なればひぢりに近しと云つ
可し。摺鉢に蓋がなくとも汝鞘も兼たる形ちとなりてこゝろ尤安し。主汝を愛すこと和睦が梅
妻鶴子の如し。汝仕ふること主の如意汝煩惱を起しもこのすがたとなるならば日々命をもへら
す可し、ア、雷木子雷木子忘れても再び鉢を摺みそをつけることなけれ

静さやくの字となりて千代八千世

我友文口兄みちのおく松前に春たちて秋の末歸るときつて祝し送るに

旅衣かすみとともに立ち初めてもみじのにしき着て歸るらん

忍ふ可きその地なければ一本の帯(書)がもとに鳴きりぎりす

伊勢松坂竹内嘉次郎兄より京師嵐山の松だけなりとて送りければ

花紅葉よきは申さすまたくくいあらしの山の松たけの味

とせほどきすませしは親の慈悲けさは輪をかけめさましくせん
ほどきすてつべんかけたも古しとて今朝は輪をかけたかと鳴けり

我體の血を分けし身と思ふては秋の蚤蚊もあはれなりけり

桃ながら梅の香もあり櫻色竹のみどりにさしはさむこと

世をうしとのがれし山もましらむれ、いつれか無爲のすまゐなるらむ

しら糸にもみじこきませあやなして錦織かもらしたきの川はた

庚申深秋瀧の川邊にて

東臺山下老迂疎。自笑年來活計無。只有硯田耕未了。好花還向筆端鋤。

已未元旦移居東臺下谷 醉後戲自書并題

岩角停筇望。千林黃葉新。歸來寫真景。吾亦畫中人。

賣りに行そたを時とみそさゝえ鳴て別るゝ八瀬のわけほの

嘉永六年丑の正月十六、十七、十八、三日雪ふりて庭の小松を埋めければ戯て

六つの花三日ついで三六の十八日につもりけるかな

海防のかためも水のあはたむすべロリと舌をさきに出されて

ぶいはへのよふたとべロリ舌を出し

あべ川はあまいとべロリ舌を出し

異國人むかしは伊勢を恐れしか今はあべこべ伊勢がこはがる

我故郷隣古橋村あり村に字四あり、南臺、花輪、尾先、高本なり。南臺南の方高き所に
一の美人あり四ヶ村中美名あり、其女の許に贈るとて

南臺花は南をさき初て誰がもどからも眺められけり

あなゆたか雑煮にはらのはる日かな

にこりたる身は世に軽くすむぞよき我家守るさへ重荷なりけり

癸亥初夏ほととぎすきかんとて夜をあかせともきかず、大菜根と二人してひるねし

て夢に梅花顔にちるを見る壽陽公主の故事を思ひ出して

聞せずひるねさせるや時公むめにはあらで顔に卯の花

余好んで馬鹿のむきみを喰す。其腹中より豆蟹と云ふもの出る事まゝありければ思ひあたりし事ありてかに、對していふ、豆蟹々々汝能をたのんで水陸を壇に横行し、取るまじきを取りとがなきを餌剪すれども天網かばか貝の爲にくらはる。足もどに心附かざるも命なるかな

みな人はうへに目のつき横に行蘆間の蟹のあはれ世の中

又ばか貝に示す。馬鹿汝羽もなければ手足もなし。才知はもとより愚痴の名を得るもむべなり、さりながら薄貝を家となし利よくにはしらず、口を開て天録を待ち、能く獨りを慎む。吾は汝を君子の風ありと観れば歌よみてかきつゝけり。

思ふども及ばぬ身にはなか／＼におのれ／＼のなる事をせよ

他人福壽草の名を好むくせありながらつまりたるを喜ぶは余が解さるる所、よつて

太く長きを求む太く長きは價も安し

福は大壽は長かれと思ふ身は我家の花を見てなぐさめよ

苦む者は日長し樂む人は日短し人間の一日は仙家の一年の如し、一酔後の一時は仙家の一年なる可し我五十年は仙家の二十一万六千年たのしからずや

年を言はず一時無異に暮す人は一時の神といふべかりけり

見めぐりて歸る忘るゝ夕風に花を吹ゆくす田の川つら

鶯の一聲鳴や重ぬらん、なつなをたゞくせつ貝の音

はやるどて似たものみせがあららこちら口にまかせてうそをついた煮 (佃煮の書に)

乙丑四月八日此一枝を得て其名を知らず。うつし繪になしたのしみしに誰やらん百千鳥とか申せしに其色黄をもて山吹の花色衣の故事を思ひ出して
一もとの艸もの云はで誰やらんさへづりをめし百千鳥はな

山房無妻愛花如妻有友從遠方携一枝來者先生喜見曰天女化花來乎

友大笑謂我前身爲羅浮山翠羽矣可愛乘興寫真焉

大山蓮花、天女花云

丁卯四月末

思ひつゝけて只ありあけの月に語らん我こゝろ

卯月末つかたある夜戸たゞくかと思はれ出て見れば誰もなし鳥の飛行羽音のみ

無き人のたま音づるゝ水鶏かな

又戯て

とらえんとすれば飛去るこはいかに喰ひなど云へる名にも似ずして

もはや彼人の百日にもちかけれどきのふけふのよふにこゝちにありけるころも卯月の廿日あまり残れる月のかすかなる未明淡墨のしみたることく空ひとりの影を見て思ひつゝけてほど／＼とさすたより聞たやなき人の

丁卯の初夢に宇治川の先陣の錦繪を見てかくはよめる

馬のはる日ものびて候川柳

安政辰年五月末弟子湖城を伴ひて越路に遊ひけるが、雨に行かすの故事に據り、俱に雨具をもたで旅立けり。六月の初め上毛の湯宿に宿らんとせし野中にてにはかに夕立しければ師弟いかなどもすることなく木の葉ちかやをとりて身にまどひ、川をこして行すがたを湖城子書きて見せければおかしさのあまり、

うつし繪に見る我影の仙人フミウシよ浮世のうさを知るや知らずや

おいよ靈婆の友につけていはく

一昧わたしは二月中三て死たる四手の旅五くらく差て行けるが、六道の辻も迷はずに七佛かたに助けられ、八葉の蓮花にのせられて、九品の佛の側にて十萬億土の樂みをする。

越の雪消のおごりにうかれ、かたなさす身も笠を着て

女かと思ればをどこなりけり、なりひらのおもかげはむかし男なれば今見る可きに
あらず、當世はやりし源左衛門おもしろの海道くたりやなそとかたるもつきせじと
おもへば歌によみてかきつゝける。

またも世にあるものでない過去未來、源左衛門が舞ひのなりふり

勿笑無花有果誰知美華少實

はな好む佛と人の思ふかも本來くふは誰もみた〜 (阿彌陀無花果を食ふ畫に)

余少年時學道。不爲少年遊。可謂無花人矣。性酷好無華果。盖以其有類於己也。
因今戲作此圖并題爾

鼎湖繪日記抄

明治二十四年一月一日 晴

下總千葉郡金堀新田、矢橋兩家并鐵右衛門と共に坪井村に行。齋藤主人出迎ふ。齋藤與右衛門方にて席上揮毫。扇子一對進上す。

二日 晴

新田ヲ發足ス。矢橋若主人送り吳レタリ。途上小松ヲ拔キ取ル。舟橋吉野屋ニ着。

三日

行徳ニ着。乗船ス。

十日 晴

夜年玉扇子ヲ畫ク。

十七日 晴

日本美術協會常會。前田(健次郎)先生建築ノ講話アル。

十八日 晴

早朝大森(惟中)先生來臨。東洋美術雜誌編輯ノヲ談ス。并ニ古公直父去郤ノ圖調製ニ付服制器具車裝等取調ノヲ托ス。

二十二日 晴

ゆき子徳川公奥へ上ル。扇子ヲ呈ス。奥方ヨリ金子反物帶地其外品々下サル。女中ヨリ小切簪其外品々下サル。

二十三日 晴

夜、日本美術協會繪畫研究會出品本月課題隱士出山ノ圖着手ス。

二十五日 晴

日本美術協會繪畫研究會ニ出席ス。出品畫ハ絹本青綠山水。課題隱士出山圖。發會ナル爲多數ノ出品アリ。菅原白龍、武村耕靄、跡見玉枝、野口小蘋、高林芳谷、下條正雄、玉置清之進等佳作ナリキ。

二十六日

夜、大森先生來臨、東洋美術雜誌出版ノ義ニ付談シアル。

二月四日 晴

大森先生來臨。古公宣父圖案ニ付種々説明アル。

五日 晴

奥原晴翠女史來ル。北海道産林檎下サル。

七日 晴

大森先生來臨。古公宣父去卻圖材料書數卷御持參。種々説明下サル。難有々々。禮記圖三冊

皇清經解程微君考工創物小記 三冊、欽定周官義疏九冊、合拾五冊。

十四日 晴

忍亭主人依頼明十五日開會ノ文雅書畫會へ出品スベキ書ニ着手ス。

池ノ端文雅書畫會張出二枚落成ス。病中ナル故出來よろしからず。

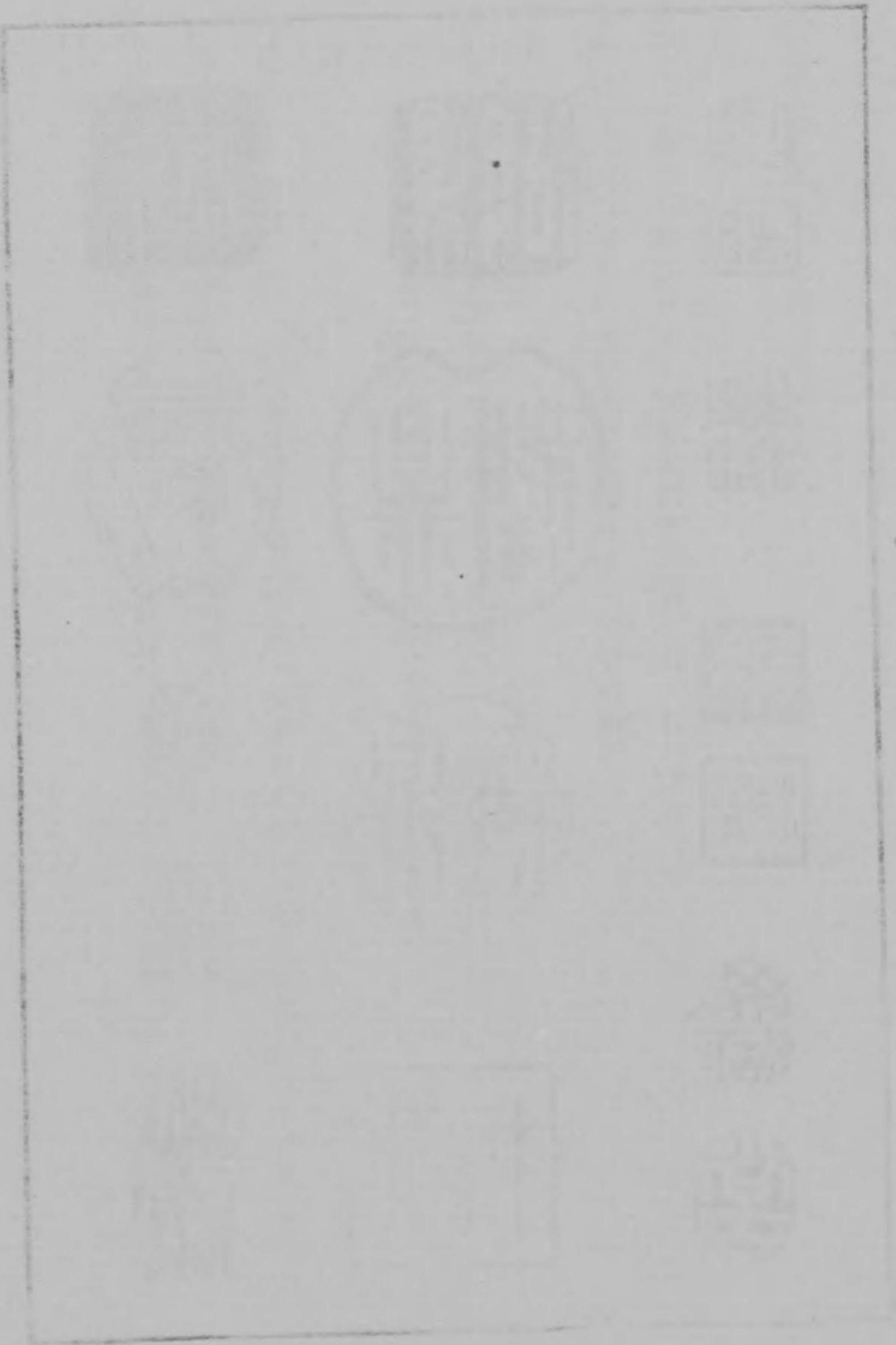
十五日 晴

東宮殿下ヨリ御寮ノ御馬油畫揮毫方明治美術會へ御達有之候ニ付筆者會員中ヨリ壹名投票有之度旨通知有之候ニ付淺井忠氏ヲ投選ノ通知書出ス。

古公去卻ノ圖ニ付冠掲等形不明瞭ナル故大森先生へ質問狀差出ス。文雅堂ヨリ張出取りニ來ル渡ス。



湖泉印譜



大森先生來臨。三禮圖御持參有之、毀章甫冠ノ説明アル。

十六日 晴

野口小蘗先生へ周代進賢冠之圖寫シ封入書狀出ス。

十七日

野口親君ヨリ進賢冠寫禮狀來ル。來ル廿日午後五時ヨリ月次會相開キ候旨明治美術會事務所ヨリ通知アル。

十八日 晴

客歲稻垣君ヨリ依頼アリタル墨畫山水ニ着手ス。美術協會ヨリ報告書并ニ人名錄來ル。又會頭副會頭改撰投票アリタキ旨通知アル。

十九日 晴

稻垣氏依頼ノ墨畫山水圖落成ス。

明月松澗照。清泉石上流。辛卯孟春鼎湖寫

二十日 晴

川邊御楯先生ヲ訪ヒ東洋美術會人會アランヲ乞フ。承諾アル。雜誌插畫ノヲ依頼ス。濱

村先生來合セ居ル。同夜高田先生來臨有之東洋美術雜誌体裁ノ事ヲ談ス。川邊君入會セシ事ヲ嘶ス。又美術雜誌へ鎌足公像挿入ノ義モ承諾シタル旨相嘶候處高田君モ大ニ欣悅セラル。

二十五日 晴

德兵衛老人來リ、眞丹主人豊太閣花見之圖一覽シタキ旨申來ル、相渡ス。

三月一日 晴

日本美術協會ニ於テ繪畫研究會開會ニ付出席ス。出品畫ハ題外ニシテ豫テ稻垣氏依頼ノ水墨月夜之山水壹幀出品ス。夜ニ入棟居景範君來臨。畫ヲ依頼有之、承諾ス。此夜古公ノ圖着色ニ從事ス。

二日 晴

退局掛ヨリ小石川音羽町小杉君へ豫而借用セシ書籍返上ス。○徵古雜抄圖畫、○阿波國名東郡黒田村兜庵所藏古冑圖。山名先生ヲ訪問。不在ナリシ。同夜本間耕曹老人ヲ訪問ス。大ニ餐應アル。畫幅數點見セラル。光琳二枚折實ニ佳妙、愛玩スヘキモノ也。

三日 曇

大森惟中先生の旅行先へ書狀ヲ出ス。古公ノ圖夜ニ入着色ス。明治美術會ヨリ大會掛員人選

ノ義申來ル。文雅堂ヨリ連月會張出依頼アル。

五日 曇 夜降雨

夜、川邊先生ヲ訪ヒ、美術雜誌畫圖依頼ス、先生承諾シタリ。東京府ヨリ賞牌可渡旨召喚狀來ル。

六日 曇

東京府廳へ出頭。第三回内國勸業博覽會出品ニ對シ妙技賞牌ヲ受取ル。

七日 晴

船橋吉野屋權六殿來臨鷄卵被下。富士筑波二幅對御依頼有之候事。

八日 日曜 晴

大掃除ニ付出勤、歸宅後文雅堂張出二枚相認める。

九日 曇 夜雨

佐野會頭ヨリ昨年繪畫展覽會審査相勤メタルニ付謝義として銀盃一個贈らる。

十一日 晴

衆議院議員百餘名印刷工場觀覽ニ來ル。局長先導工業ノ順序ヲ説明ス。一同満足セリ。

十四日 晴

午後第一時ヨリ退局。日本美術協會常會ニ出席ス。松尾君本邦工藝品ニ對スル米國大博覽會出品ニ付同國人ノ感情ノ講話アリ。前田健次郎君ニ面會。東洋美術編輯長タル事ヲ依頼ス。承諾アル。

十五日 晴 夕刻小雨

早朝古公去卻圖着色ニ從事ス。略落成ニ近ツキタリ。
午前棟居君來臨。文王ノ圖手直シノ個所依頼通り修正ヲ加へ上ル。同人満足シテ持歸ラル。夕刻向じま松次郎來ル。量壹個貸與、鯉しほから遣す。並鬼念佛の畫。
鬼の念佛の入用は小兒夜なきするよしにて昔風のおまじない也

十七日 曇 時々小雨

明治美術會ヨリ評議員七名改撰ニ付投票用紙封入書狀來ル。明治美術會ヨリ普通教育上毛筆畫ト鉛筆畫トノ得失調査ノ件會員平瀨氏ヨリ發讀有之候ニ付評議員會ニ於テ其得失如何研究スヘキニ付意見申出ヘキ旨通知有之。

古公畫賛下書高田先生御認メ下サル難有。夜ニ入り手習の爲ニ葉相認める。

十九日 晴

滿吉ヲシテ前田氏方へ手紙遣ス。返事工場へ持參ス。直ニ須原屋及美術協會へ相廻ス。夜高田北島兩氏來ル美術協會へ同行。前田健次郎君ニ引合セ、美術雜誌編輯ノ事ヲ談ス總テ熟議ス。佐野會頭ヨリ美術展覽會第一部審査ノ義囑托有之候事。坪井氏ヨリ吉田氏愛孫ノ五月初節句ノ武者畫一幀依頼アル。

廿日 晴

日本美術協會へ憚南田筆芍藥桃花之圖、明鏡殺筆美人卷、椿山筆四季草花帖、啓書記筆三笑之圖一幅、先人我古先生筆宋吉天相之圖一幅今春展覽會ニ出品ス。明日ヨリ開會ノ處何分無人ニテ出品札認方手廻兼困難ノ様子ナリ。爲ニ書方ニ應ジ夜二時過ニ歸宅セリ。陳列ハ鹽田前田兩氏擔當ス。札紙書方ハ佐野君坪井君余ノ三名也。

廿一日 降雨

展覽會出品古公竄父避狄之圖午後三時落成ス。雨中ナルタメ經師へ持參スル事ヲ得ズ、残念ノ事ナリ。明治美術會ヨリ第十一回報告書到來ス。又廿九日常會ニテ五分演說アル旨通知有之。多人數ノ辯士ナレハ定メシ面白カルベシ。

廿二日 降雨 日曜日

古公之圖縁張ノ爲經師内田へ持參相頼ム。五尺五寸×二尺五寸。絹本大着色、業十有余日ニシテ成。人物九十餘人着手二月二十一日ナリ。

松本楓湖先生方ヲ訪問ス。會日ニテ門人等人物ノ寫生ニ從事ス。先生種々指圖ナス。中々勉強ノ事ナリ。此法ハ容齋先生ノ遺法也。歸路川邊御楯先生ヲ訪ヒ、豫而依頼セシ東洋美術誌挿畫重盛父清盛ノ非謀ヲ諫止スルノ圖催促ス。

先生曰兩三日ノ内ト、誠ニ安請合ナリ。

夕刻稻垣氏方へ行。豫而依頼アリシ墨畫月夜山水持參ス同氏満足セリ。

廿三日 晴 風

日本美術協會ヨリ客歲十月ノ出品ニ對シ銀牌出來ニ付渡サル。本日縁張出來ニ付古公ノ圖上野日本美術協會へ出品ス。第三回内國勸業博覽會審査報告十一冊下賜。

廿六日

夜田原梅谷先生ヲ訪問ス。先生病後ニ付展覽會出品未タ半成ナリ。

廿八日 雨

夜古谷氏依頼瀑布ノ圖ニ着手ス。

二十九日 晴

午後美術協會ニ於テ繪畫研究會相開ク。題外ニテ古谷氏ヨリ依頼ノ湯瀧ノ圖出品シ、歸路明治美術會ニ到ル。閉會後ニ付事務所へ投撰封書差出歸宅ス

四月三日 晴

豫而増山氏ヨリ依頼アリシ王子村製紙場ノ圖調製ノ爲王子ニ到リ眞景ヲ寫ス。滿吉貞次鶴三ヲ召連レタリ。午後美術協會ニ至リ鮮ノ折ヲ贈ル。黒川博士ヲ訪ヒ美術雜誌賛成員ノ義依頼ス。承諾アル。川邊先生ヲ訪ヒ重盛諫言ノ圖催促ス。又兩三日ノ内トノ事ナリ。

五日 晴

坪井氏依頼ノ頼義ノ圖着手ス。清水庫三郎君來臨先考筆宋吉天相ノ圖懇望アル。

七日 晴

谷謹一郎君印刷局へ來ラレ、舊知事ヨリ依頼有之袋戸小襖中棚小襖各四枚極彩色花鳥ノ圖依頼アル。

八日 晴

退局ヨリ清水氏ヲ訪ヒ宋吉天相ノ圖拾五圓ニテ賣渡ス可キ旨相談ス同氏大ニ悦バレタリ。

九日 晴

清水君來臨額面依頼アル。天相ノ圖幅相渡ス、豊公ノ圖藤網ノ圖貸與ス

同夜活版部ニ廻リ官報印刷器械ノ運轉ヲ觀ル。此機械ヲ輪轉マシーネト云フ。一時間ニ表裏印刷ノモノ一万五千枚ヲ刷成ス。誠ニ驚ク可キ新發明ナリ。今般佛國ヨリ七千圓ニテ購入ス。

十日 晴

夜美術協會ニ到リ前田氏ニ面會シ、雜誌廣告及其他催促ス。川崎氏ヨリ同君今泉兩氏雜誌へ姓名記載ノ義承諾ノ旨報知アル。又土佐光信三百五十年追善ニ付投書一葉依頼ノ義申越サル。

十一日 晴

夜文雅堂展覽會張出二葉揮毫ス。

十二日 晴

前田先生ヨリ東洋美術誌廣告文遣サル。

十五日 曇

皇太后宮陛下美術協會へ行啓ニ付奉送迎相勤メ拜謁被仰付、列品御覽ノ後餘興トシテ舞踊

有之

十六日 朝雨

前田氏ヨリ本月中ニ編輯出來サル旨斷來ル。大森氏ヨリ美術雜誌ニ入ル可キ原稿來ル。

十七日 曇

増山君依頼ノ王子村製紙場眞景版下ヲ畫ク。

十八日 曇

明治美術會評議員會有之、出席ス。

十九日 日曜日 晴

早朝大森先生來臨、午後川崎老人來臨、華原啓考証御持參有之。楠公笠置山へ登ルノ圖、及頼義岩清水ノ圖、富士筑波二幅對并清水信夫連月會展觀等落成ス。少シク安心セリ。

廿日 晴

午後一時御出門ニテ天皇陛下美術協會展覽會へ行幸有之會員奉送迎ニ出ル。

廓下ニテ拜謁ス。

廿三日

夜黒川博士ヲ訪ヒ、玉虫厨子ノ傳來ヲ問フ。詳細説明アル。書取ル。

廿四日

前田氏へ玉虫厨子金具校合摺并來歴書相廻ス。

廿五日

美術協會展覽會審査ノ義ニ付評議有之出席ス。谷君依頼袋戸向じまの景着手ス古公賣父去郤ノ圖參考ノ爲メ車服部武器部器具部三冊陳列ス。村瀬玉田先生同道來宅アリ瑞香寫生貸上ル。夜ニ入谷君依頼鴉ノ圖下畫着手ス。

廿七日 晴

坪井先生來臨豫而依頼アリシ頼義ノ圖相渡ス甚満足ノ様子ナリ。

廿九日 晴

向じま小兒初節句ニ付武内宿禰ノ幅祝トシテゆき持參スみち大ニよろこぶ。

凌雲閣杉崎ヨリ大森氏發行演劇正本表紙依頼ニ付原稿寄越さる。

三十日 晴

川邊老人ヲ訪フ。美術協會審査ニ付種々談話アル。先生ノ說誠ニ面白シ。重盛ノ圖揮毫ノ禮

進呈ス。夜ニ入美術協會ニ至リ審査評點ニ着手ス。誠ニ骨ノ折レル事也。

五月一日 晴

日本美術協會審査員集會ノ爲午前第十時ヨリ退局ス。川崎千虎先生ヨリ依頼アリシ土佐光信三百五十年ノ遠忌ト光文ノ十三回忌トノ追善會展觀出來ニ付千虎翁ニ贈ル。美術展覽會審査員一同集會評議アル。山高審査長規則書及附點紙等渡サル。

二日 晴

西村老人寶丹主人五十賀ノ畫依頼ノ爲來臨アル。文雅堂展覽會出品相渡ス。

三日 日曜日 晴

中川登先生來臨、銅版刷新發明シタリトテ見セラル。二葉下サル。同氏ハ誠ニ技術ニ熱心ノ人也。

四日

早朝ニ向じま親父さま御出アリ松次郎小兒昨夜中死去ノ趣御咄アル。誠ニ驚キ入りタル事トモナリ。

五日

ゆき向じまへ弔に至リ香奠ヲ差出ス。

八 日 晴

日本美術協會審査結了ニ付、評議有之、出席ス。意見異動ヲ申立ル。會頭審査長其説ヲ入レタリ。此事ハ例ノ〇〇ノ事アリ誠ニ毎度ノ事ニテ困リタル事ナリ。

九 日

病氣ニ付出務セズ。又展覽會褒賞贈與式ニ臨席セズ。田原梅谷先生協會ヨリ歸路立寄ラル。小生ノ銅賞ヲ得タルコトヲ談話ス。

二十日

高田先生來臨。東洋美術誌發行シタル旨咄サル。鮮齋永興先生來リ先師永濯翁一週忌追幅書畫會相催候ニ付展觀畫揮毫ノ義依頼アル。

十一日

谷謹一郎氏ヨリ御依頼ノ袋戸出來ニ付差上ル。右ハ谷君舊知事毛利公ナリ。

明治美術會ヨリ左ノ通申來ル

昨十日日本會第三回大會ニ於テ評議員半数改撰開票ノ結果ニ困リ、當撰相成候條此段及御通

知候也

上野公園 明治美術會

石井重賢殿

追報 當撰七名ハ左ノ通

大野幸彦君 川村清雄君 辰野金吾君 石井重賢君

平瀬作五郎君 加地爲也君 大熊氏廣君

十三日 晴

瀧和亭先生ヲ訪ヒ、東洋美術挿畫依頼ス承諾アル。寶丹主人賀祝ノ畫出來ス。

十五日

小林永興書畫會展觀落成ス。米ハ昂ル物品ハ賣レズ、世ノ中不景氣。

十七日

滿吉召連明治美術會展覽ニ至ル。又協會ニ至リ出品物四點受取歸ル。瀧先生ヨリ東洋美術挿畫御送付アル。同日滿吉召連鮮齋永興ノ書畫會ニ臨ム。露國皇太子御遭難後ノ爲カ誠ニ出席者少シ。氣ノ毒千萬ナリ。高田先生ヲ訪ヒ、中村樓へ同道ノ心組ノ處只今出タリト云フ。

二十日 晴

清水君來局豫テ約束セシ福田半香青綠山水一幅相渡ス。夜ニ入高田先生來問。

二十二日 晴

先人我古先生祭日ニ付休暇下賜。ゆき鶴三四郎召連慕參ス。すり鉢山ニテ一憩ス。歸路雁鍋ニテ中食ス。

二十三日 晴

大森君ヨリ豫テ依頼アリテ揮毫シタル秀郷ノ像出來ニ付一冊贈リ下サル。

二十四日 晴 日曜日

白井先生訪問下サル。明治美術會切符、東洋美術一冊進呈ス。清水庫三郎君依頼額面淡青綠山水着手落成ス。夜明治美術會評議員會ニ臨席ス。長沼氏酒ノ氣ニテ松岡氏ニ當リ大ニ亂暴ス一同困ル々々。

二十五日

帝國ホテルニ至リ社主横山先生ニ面會、明治美術會廣告額面食堂へ掲ケ候義頼談候處承諾致吳候間歸宅ノ上即時美術會事務處へ委曲報道ス。

二十七日 晴

日本美術協會ヨリ春季展覽會審査慰勞トシテ目錄被下。明治美術會評議員會へ臨席ス。開會ニ行幸願出ノ件事務所并舊華族會館借受ケタルニ付維持方法等協議ス。

三十一日 日曜日

大槻先生ヲ訪フ。不在故原田竹外先生宅ヲ訪ヒ、大槻君ヨリ習齋先生書届方、并江漢鳩ノ圖并東洋畫幅預リ置吳候様頼ミ置。歸路楓湖先生ヲ訪フ。

六月七日

明治美術會事務處ニテ評議員會有之臨席ス。日本美術協會ニ立寄、展覽會出品古公去郤ノ圖請取カヘル。原田竹外先生來臨。大槻氏ヨリ返戻ノ江漢畫幅并習齋先生書御持參下サル。豫而約束アリシ石印一顆贈與アル、難有々々。高田竹山先生來駕アル。書籍出版ノ義ニ付種々意中ヲ談ス

九日

美術協會ニ而同會存廢ノ義ニ付會頭ヨリ談シ有之。

十一日

夜川邊老人ヲ訪フ。日本美術協會ハ繪畫ヲ見ルノ視力ナシナゾ甚不満足ノ旨物語ラル。誠ニ御尤千萬ナレトモ審査ノ結果合點法ナレバ致方ナシ。

十三日

退局掛ヨリ日本美術協會ニ到リ意見書ヲ部長下條氏ニ出ス。荒木寛畝先生來臨有之、本日ハ委員一同皆書面ヲ出ス。

十四日

佐藤君依頼ノ玉堂富貴ノ圖落成ス。

十六日 雨

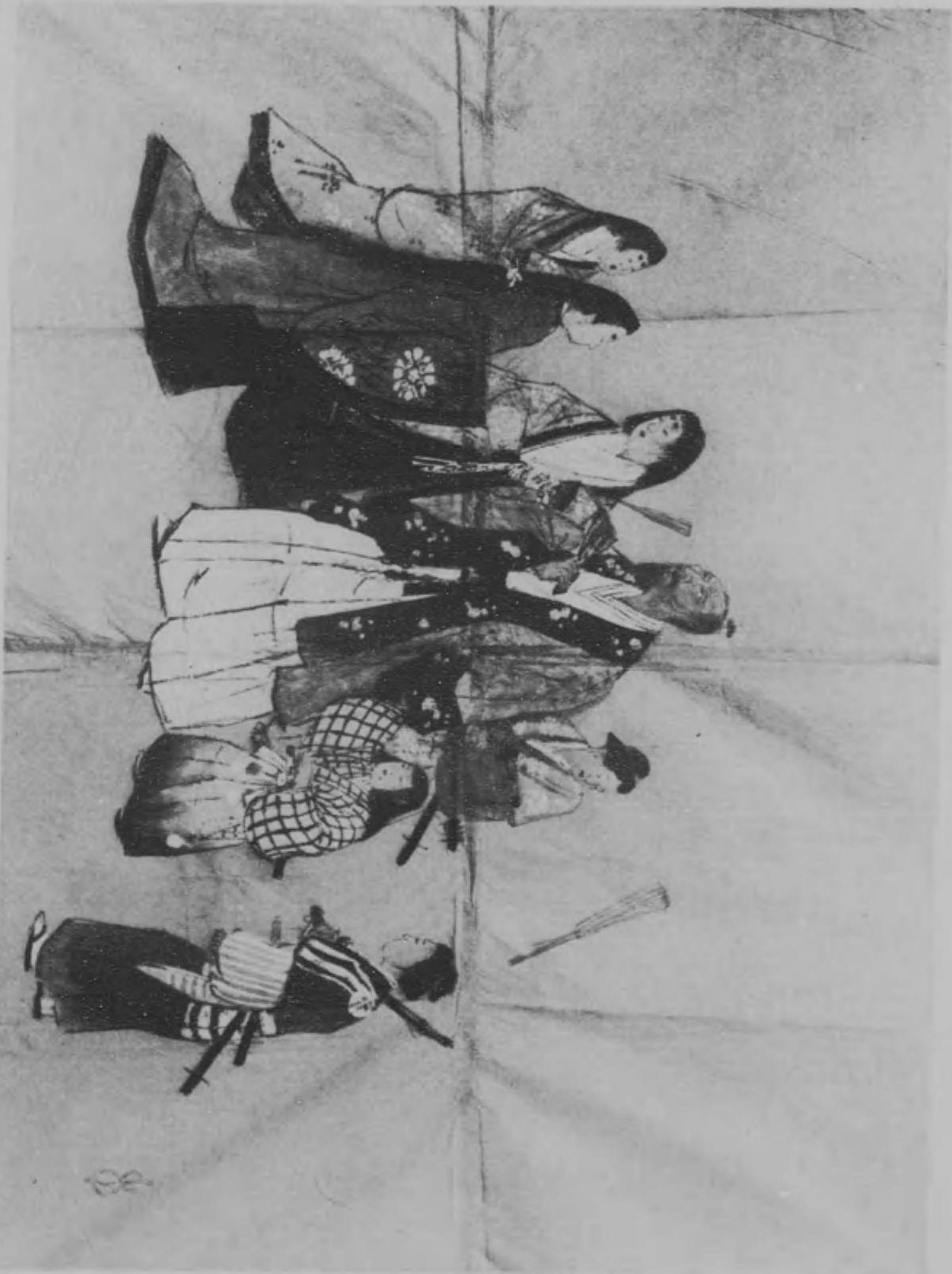
明治美術會ニ於テ常置陳列館諸規則原案落成ニテ逐條審議ヲ開タ。生モ夜ニ入出席ス。午後第十時議事ヲ畢フ。三十條略原案ニ賛成ノ方ナリ。幹事岩下氏モ臨席セラル。

十八日 晴

川崎千虎先生ヨリ土佐光信三百五十年追善展覽會目錄送附アル。

二十一日 日曜日 雨

齋藤氏來臨アリ川上一座ノ演劇ニ誘引アル。染木氏ヲ誘ヒ見物ス。書生トシテハ仲々能クヤ



筆湖鼎

繪下ノ見花齋盛公豊

ルモノナリ。

二十六日

佐野常樹君室ヲ青山ニ會葬ス。歸路本間君ノ新居ヲ訪問。本間君所藏容齋翁筆無禮講ノ圖ヲ觀ス。

七月二日

東洋美術ニ入ル可キ金洞山石門ノ圖着手ス。

三日

夜協會ニ至ル。佐野會頭ヨリ同會維持ノ義ニ付種々協議アリ、部長ヨリ差出シタル見込書ヲ朗讀セラル。

四日

白井屑先生來臨ニ枚折屏風畫御依頼アル。夜キヨソネ君本月十四日解雇相成候ニ付局長高等官課室長技手工手其他有志ノ輩ニテ離盃ヲ上野精養軒ニ開宴ス。甚盛會ナリシ。コヒー室ニテ喫烟シ或ハ談論園碁等ヲナシ、夜十時一同退散セリ。

七日

キヨソネ氏一の谷合戦ノ金屏風一双購求シタキ由ニテ鑑定ヲ乞ハレ、齋藤平林等同道ニテ參ル。時代百年位ノモノニテ土佐派ノ畫ナリ。筆者ハ分明ナラザレドモ美事ノ出來ナリ。實價四十五圓ノ由、古畫ノ廉ナルニハ驚クノ外ナシ。當時ノ畫工ニ依頼少キハ誠ニ時世ノ然ラシムル處也。

九日

支那北洋水師提督丁汝昌印刷局工場ニ來觀ス。キヨソネ氏勳三等瑞寶章ヲ賜ハル。

十一日

午後三時繪畫懇親會ヲ兩國井生村樓ニ開ク。蜂須賀知事、野村正三位、野口勝一、前田健次郎、久保田米仙等演說アル。甚盛會ナリ。

十三日

夜宮永氏來臨アル。應舉人物畫式出來ノ事ヲ談ス。

十四日

是真翁死去ノ旨報知アル。

十六日

十八日 森本大八郎君來臨有之。豊公醍醐花見ノ圖舊知事ニ見セタキヨシ申サル。御渡シ申ス。

田原梅谷子來ル。本月繪畫研究會題畫阿佛尼ノ義ニ付、いさよひ日記中花鳥ニテ阿佛ノ題ニ入ル可キ部分ヲ説明ス。同人大ニ喜バレタリ。

十九日

繪畫研究會題畫阿佛尼うつこのや峠にて山伏に行あひたるところの圖着手ス。

二十六日 日曜日

早起、溝口氏ヲ訪問ス。探幽翁筆瀑布ノ幅見セラル。甚感服セリ。日本美術協會研究會ニ出席ス。

二十八日

原田竹外先生ヲ訪ヒ豫而依頼アリシ扇面五本出來ニ付差上ル、并雪江老人隸書歸去來進上ス。歸路荒木老人ヲ訪ヒ傘借用ス。

二十九日

滿吉荒木先生へ傘返上ス。

三十日

小杉先生ヨリ古甲冑博物館へ來ル一覽ス可シト報知アル。島崎氏同道ニテ博物館ニ到リ古甲冑ヲ寫ス。之レハ本年ノ春千葉縣下ニテ掘出シタルモノ、由。先年仁德帝御陵ヨリ出テタルモノト大略同ジ。實ニ稀代ノ寶物ナリ。

八月二日

華族山井氏代理平岩道義君來臨。鎌足公像御依頼ニ付種々御頼有之。

三日

前田氏ヨリ東洋美術ニ挿入スヘキ古器高原燒陀羅尼塔御持參アル。甚精巧ノモノ也。本日博物館ニ出張、古武器寫殘リノ分ヲ摹寫ス。

四日

久保田米俣先生、村瀬玉田先生へ東洋美術挿畫催促狀出ス。夜寫真師小澤氏ヲ訪ヒ、華山木筆觀音縮寫ノ事ヲ頼ム。

五日

島崎氏御出有之、博物館出張古武器ノ考証寫了セシ旨御嘶アル。

八日

中島杉陰先生ヲ訪、小室樵山先生モ來リオル。

十日

本日ヨリ一週間暑中休暇下賜
白井君御頼ノ二枚折屏風落成ス。得能君ヲ訪ヒ、屏風ノ代價申上ル。金ノ方ニ取定相成ル。乾也翁作茶碗進呈ス。

十一日

早朝前田香雪先生ヲ訪ヒ、又北畠氏ヲ訪ヒ、東洋美術中修正ヲ要スル個處有之、秀英舎ニ到リ原稿取戻歸ル。北畠氏肖像依頼アル。

十二日

前田香雪先生ヲ訪フ。兆殿司羅漢ノ圖啓書記瀑布ノ圖相阿彌塞山ノ圖見セラル。歸路經師屋ニ到リ得能君御頼ノ風呂先頼ミ置ク。

十六日

高田先生來臨、東洋美術第四號校正刷御持參アル。

三十日

美術協會へ出品スヘキ野外蟲ノ圖着手落成ス。

九月一日 晴

田村將軍甲冑取調ノ爲黒川文學博士へ出向種々質問。先生委曲説明アル。

二 日

小杉君ヨリ東洋美術へ投書玉虫厨子考証御送附アル。

四 日

博物館へ出張、黒川博士ニ面謁ヲ乞ヒ天曆以上鏡絨方ヲ質問ス。同館ニ於テ筑紫鋒十五本ヲ觀ル。

五 日 土曜日

黒川先生ヲ問ヒ、正倉院ノ小札ニ付絨方ヲ質問ス。

六 日

小倉君依頼近江琵琶湖景額着手ス。得能君御依頼風呂先屏風出來ス。狩野雲外先生同道清水氏來リ十一月一日書畫會致候間展觀一枚認め吳レ候様御頼アリ。

八 日

小杉先生ヨリ玉虫厨子説明追加并堀出古甲ノ圖御送附アル。

十 日

夜廣小路の三橋のそばに、壯士川上音次郎のオツベケぶしをうたひ本を賣るの書生あり。夜の内職にはおもしろきことであらう。オツベケベツポーベツポー〜

二十一日

明治美術會ニ於而講義室ノ規則ニ付評議員會ヲ開ク。予モ臨席セリ。

二十三日

清水庫三郎君來臨、皆川淇園畫賛ノ幅持參アル。誠ニ非凡ノ出來ナリ。

二十七日 日曜日

繪畫研究會ニ出スヘキ課題山路霧着手、落成ス。午後第二時ヨリ日本美術協會ニ至リ、研究會ニ出席ス。下條君如雪筆山水周文筆禪僧問答の圖二幅持參アル墨畫實ニ精妙ヲ極メタルモノ。中村老人華山翁愛藏セラレタル清人ノ畫卷持參アル誠ニ珍物ナリ。

二十九日

東京彫工會秋季競技會接待掛長補依囑ノ旨會頭榎本子爵ヨリ頼狀來ル。

三十日

十一面觀世音座像一体、奈良彫童子一個、竹根彫印一顆彫工會秋季競技會ニ參考トシテ出品ス。鑑定家皆々良作ナリト曰ハレタリ。

十月一日

佐田君即非和尚筆白衣觀音ノ幅ヲ求メラル。拜見ス。運筆誠ニ妙ナリ。

二日 晴

村田丹陵先生來臨。日本青年繪畫協會規則書持參贊助アランヲ頼談セラル。會則誠ニヨシ。即時人名簿ニ自記調印セリ。

四日 晴 日曜日

彫工會ニ出席ス。久々ニテ矢野文雄先生ニ面會ス。本日ハ出品不揃ナリ。小生ノ出品セシ十
一面觀音誠ニ評判ヨシ。

六日 日

夜向じまニ到ル。乾也翁三回忌遠夜ニテ親戚門人其他知己來集。酒飯ヲ呈ス。

七日 晴

九日 晴
乾也翁三回忌法事。親戚門人知己來集拜禮ス。歸路松田ニテ晝食ス。

夜ニ入り宮下竹四郎君ヨリ鬮遊館ニ於テ觀賞會相催ニ付臨席有之度ト申來。

十一日 晴 日曜日

早朝ヨリ高鹿君へ送ルヘキ白鹿ノ圖ヲ畫ク。大略落成ス。午後ヨリ宮下氏會主ノ鑑賞會へ出席ス。大雅書對幅、兆殿司羅漢二幅、文晁大和繪、椿山畫帖、稼口畫帖、錢穀畫卷、丁雲鵬壽老一幅、應舉二幅出品ス。集客珍幅ナリト賞賛セリ。

十二日 晴

退局掛大瀧君ニ行。先生不在。妻君ニ面會シ、可翁筆出山釋迦并觀世音像ノ二幅、邊文進字景昭ノ花鳥ノ畫幅ヲ觀ス。三點共上々ノモノナリ。

十三日 晴

至急ノ御用有之左ノ辭令ヲ拜ス。

御用有之左ノ縣々へ出張ヲ命ス

印刷局技手 石井重賢

埼玉縣 群馬縣 栃木縣 茨城縣 千葉縣

明治二十四年十月十三日

大藏省

十四日 晴

上野ヨリ浦和ニ向ケ發車ス。同行ハ大藏屬渡邊長謙、技手海野信明ノ兩君ナリ。午前七時二十分浦和ニ着、埼玉縣廳ニ至リ、收税課長ノ案内ニテ金庫内ニテ取調ヲ爲ス。異狀ナシ。關稅課長ニ面會ス。夫ヨリ大賣捌所中井銀行出店ニテ取調ヲナス。異狀ナシ。浦和町藥店小泉武吉及小泉長三郎ノ兩家ニテ取調ヲナス異狀ナシ。夫ヨリ同所停車場前ニテ一憩中喰ス。午後十二時十七分同所ヲ發車シ、前橋ニ着。即時群馬縣廳ニ到リ、竹内收税長ニ面會シ、倉庫内ニテ取調ヲ爲ス。異狀ナシ。此夜前橋白井銀次郎方ニ投宿ス。

十五日 晴

午前第六時十五分同所ヲ發車シ、駒形、伊勢崎、國定、大間々、桐生、小又、足利、佐野、栃木ヲ經テ宇津宮ニ着、即時栃木縣廳ニ到リ飯塚收税長ニ面會シ、又前同様取調ヲ爲ス。異狀ナシ。又收税長ノ室ニテ引揚物ヲ點檢ス。數袋ノ内偽造品ヲ發見ス。皆木製ノ凸版式ニ出タルモノ、ミナリ。午前第十一時三十分宇都宮停車場前白木嘉平方ニテ中喰シ、同十二時十

八分同所ヲ發車シ、小山、結城、川島、下館、岩瀬、福原、笠間、シ、土、内原ヲ經テ水戸ニ着ス。夕五時縣廳ニ到ル。穗積收税長ノ出頭ヲ乞フ。即時課長ト共ニ出頭アリ取調ヲ爲ス。異狀ナシ。旅舎鈴木屋庄兵衛方ニ投宿ス。

十六日 晴

午前第六時二十分水戸發車ス、シ、土、笠間、岩瀬、下館、川島、結城ヲ經テ小山着、一時間休停セリ。午前第九時五十五分小山ヲ發車シ、古河、栗橋ヲ經、久喜、蓮田、大宮、浦和、赤羽、王子ヲ經テ上野ニ着、夫ヨリ腕車ニテ行德、舟橋ヲ經テ千葉ニ着ス。時ニ夕五時ナリ。海岸ニテ夕陽ノ富岳ヲ視ル。夜ニ入り縣廳ニ到ル。立石收税長出應アリ。前日ノ如ク取調ヲ爲ス。異狀ナシ。此夜加納屋石塚友七方ニ投宿セリ。

十七日

早朝縣廳ニ到リ又々取調ヲ爲シ、御用濟、午前第十時千葉町ヲ發車シ、十一時過ギ船橋宿ニ着ク。一同中喰ス。夫ヨリ人力車ニテ歸京ノ途ニ就ク。八幡ニテ竹藪ヲ見ル。兩國ニテ夕飯ヲ喫シ、渡邊氏ニ別レ、海野氏同道、内田課長宅ニ到リ、歸京セル旨ヲ届ク。

二十日

井上文雄先生息女由良子清水信夫氏同道ニテ來臨、文雄翁二十三年追善書畫會來十一月八日
中村樓ニ於テ催シ候旨ニテ張出シ御頼ミアル。

二十五日 日曜日

木村兄來臨、新發明紙專賣願ノ義ニ付平山氏方迄同行依頼アリ同道ス。夫ヨリ井上氏宅ニ立
寄、土岐氏ヲ呼寄、平山氏方ヘ到ル。不在故一書ヲ殘シ歸宅ス。

清水庫三郎氏來臨、曲玉、瓶下サル。遠州古御所ノ御陵墓ヨリ堀出シタルモノ也

狩野雲外先生書畫會ニ出品スヘキ張出ニ着手ス。本日午後繪畫研究會ヲ上野公園美術協會ニ
開ク。予モ出席ス。出品ハ曾テ高鹿氏ノ爲ニ揮毫セシ白鹿ノ圖ヲ持參ス。席上揮毫アリ。

二十八日 小雨

岐阜、愛知、福井、江州、京阪等大地震、近來會テ聞カサル程ノ事ナリ。就中岐阜大垣ハ市
中不殘火災ニ罹リタル由、死傷二千餘ナリト云、實ニ可驚事ナリ。

十一月十一日 晴 日曜日

狩野雲外先生書畫會ヲ中村樓ニ開ク。出席揮毫ス。

二日

村田丹陵先生來臨アル。

三日

島崎柳塢先生來臨。井上文雄翁二十三年追福會張出ニ着手ス。兼題初冬落葉。

青年共進會ニ出品スヘキ淡青綠山水ニ着手ス。

八日 日曜日

午後井上由良子書畫會ニ出席ス。

十五日 日曜日

青年繪畫研究會へ出品ス可キ青綠山水并ニ吉川村高鹿氏ニ贈ルヘキ圖揮毫ス。

二幅共落成ス。此夕綠張ノ爲メ經師屋ヘ持參ス。

十八日

富田林向日保雄氏書翰持參ニテ楠公圖請取人來ル。畫帖五枚ト共ニ相渡ス。

二十日

杉陰先生來臨アル。青年繪畫展覽會へ出品畫持參ス。歸路博物館ニ到リ、小杉先生ニ古甲冑
圖返上ス。明治美術會ヨリ評議員會相開キ候ニ付明二十一日午後第四時ヨリ出席アリタキ旨

通知アル。

二十一日

明治美術會へ出席セザル旨斷書出ス。

二十二日 日曜日

高田君同道ニテ埼玉縣下二合半吉川村高鹿新八君方ヲ訪フ。行掛ケ青年臨時繪畫研究会ヲ一覽。榎戸ニテ中食ス。同夜高鹿君種々饗應アル。

二十三日

高鹿氏ヲ別レ歸路ニ就ク、小雨降ル。同日川村先生來臨、明治美術月次會ノ月番ノ義ニ付相談アリ。

二十八日

岡倉先生ヨリ明二十九日青年繪畫臨時研究会へ出品セシ人々ト懇親會ヲ根岸鶯花園ニ於テ相催候ニ付出席アリタキ旨通知アル。高橋玉淵先生ヨリ震災救恤義捐畫出品アリタキ旨ニテ絹地遣ハサル。

二十九日 日曜日

築山先生依頼富岳ノ圖着手落成。上野日本美術協會へ出品ス。濱村先生來臨。おひる差上ル。上野公園繪畫研究会ニ出席ス。同日新坂ノ鶯華園青年繪畫協會ノ親睦ノ宴ニ出席ス。十二月二日

築山先生御依頼ノ富岳ノ圖差上ル。同氏甚満足セリ。明治美術會常會相催候ニ付小生月番ニ當リタル故打合ノ爲同會事務ニ行ク。

三日

明治美術會評議員會ニ出席ス。小生月番ノ事務打合セアル。

四日

博物館ニ到リ、玉蟲厨子密陀繪捨身ノ圖臨摹ス。小杉先生ヲ誘導シテ歸宅ス。先生ニ聖徳太子ノ像ヲ見セル。先生乾也翁ノ技術精巧ヲ極メタリト賞賛セリ。

五日

岐阜愛知福井ノ三縣震災救恤義捐ノ繪畫ニ着手ス。局長殿御頼ノ分ハ秋江漁唱ノ圖東京新報社ヨリ直接依頼ノ分ハ公助受杖圖二幀共半成ナリ。

六日

日曜日

猪瀬東寧先生信州ヨリ歸京眞綿下サル。高田竹山先生來臨アリ。義捐書牡丹ノ圖御持參アリ

拜見ス。誠ニ佳作ナリ。此日終日義捐書ヲ書ク。未落成ニ至ラズ。

七日

東寧先生來臨アリ。小杉先生ヨリ蜂須賀侯ノ様子御返事アル。

九日

震災義捐書出來ニ付山水ノ分得能君へ差上ル。

十三日

明治美術會月次小會開會ニテ松岡君演說。又本多君明暗ノ演說ハ不參ニ付高島君朗讀セラル。繪畫ハ油繪水彩并メキシコ戰爭圖十二枚等アル。

十四日

北島氏依頼ノ一月年玉用大小口書版下出來ス。

十五日

濱村先生へ古公ノ圖函出來ニ付ゆき持參ス。

二十一日



明治美術會評議員會有之臨席ス。一月發會ノ手續等相談アル。

二十二日

ゆき徳川公へ參上ス。來一月試筆御手本上ル。東洋美術五、六、七三冊上ル。

二十三日

黒川先生へ局長ヨリ故實取調ノ謝儀二十圓贈與相成ニ付御使トシテ持參ス。

二十八日

華山翁山水幅鑑定ノ爲村田先生御持參アル。

明治二十五年一月元旦

午前第八時印刷局ニ出頭新年祝賀申上ル。香川君ノ宅ニテ雲龍ノ圖ヲ望マル。揮毫ス。

三日

岸田吟香先生ヲ訪問シ、十七日美術演說ノ事ヲ依頼ス。小野寺、杉田、平林、田澤、島崎ノ
五家ニ年賀ニ出ル。扇子ヲ進呈ス。島崎氏亡大人ノ賜リタル大盃ニテ頂戴シ大醉々々。島崎
先生ノ寫生帖ヲ拜見ス。誠ニ勉強セラレタルモノナリ感服ス。

六日

木村兄來臨。小學校褒賞畫圖案御依頼アル。承諾ス。

十日

早朝溝口桂巖老人來臨。詩集上梓スルニ付肖像ノ揮毫ヲ依頼アル。即時半身ノ像ヲ畫キ與フ。満足ノ様子ナリ。

十二日

木村氏、土岐氏、東城氏、褒賞畫調製ニ付協議ノ爲來臨アル。

十五日

濱村先生來ル。古公去邇圖越後へ送りタル旨御嘶アル。

十七日

早朝黒川先生ヲ訪ヒ小楠公艸稿檢閲ヲ願フ。空海書卷進呈ス。甚満足セラル。木村兄ヨリ依頼ノ通り褒賞畫ニ黒川博士ノ関ト記載致度旨願出テ承諾有之候事。此日寛敏先生ヲ訪フ。

十九日

木村君、土岐君、楠山君來臨、小學校褒賞畫小楠公竹馬遊ノ圖出來ニ付相渡ス。

二十一日

前島和橋氏嗣名會張出落成ス。『一路寒山萬木中』

二十二日

明治美術會評議會ニ欠席ニ付斷書出ス。

二十四日

ゆき召連二州樓ノ書畫會(前島先生嗣名會)ニ到ル。甚盛會ナリシ。久々ニテ魯文翁ニ面會セリ。餘與トシテチャリ義太夫其他落語皿まはし等アリ。上野日本美術協會研究會ニ出席ス。此日ノ課題西行ノ圖ヲ出シ、參考ノ爲丁雲鵬壽老文晁翁大和繪若菜ノ圖ヲ出ス。東城先生來臨、小楠公石版下畫持參相談アル。

二十五日

大槻先生來臨、木製茶碗御持參アリ、向島方へ同品蓋調製見本トシテ差上置候間返戻有之度旨御嘶アル。

三十日

黒川博士へ出、蒙古襲來ノ畫并紫式部石山寺ノ圖持參閱ヲ乞フ。

二月三日

酒井君ヨリ豫テ御依頼ノ雛ノ圖出來ス。川邊白鶴死去ノ旨報知アル。小杉先生ヨリ不日九州地方へ發足ニ付東洋美術二月ノ分四五冊送付アリタキ旨依頼ニ付、其旨北島へ申通ズ。

六日

荒木、松本、久保田、野村、川端、以上六先生ヨリ來ル七日無極庵集會アリタキ旨通知書來ル。

七日

鎌足ノ像版下落成ス。午後池ノ端無極庵ニ左ノ畫人集會シ、畫帖發行ノ事ヲ評議ス。松本楓湖、荒木寛敏、菅原白龍、久保田米俣、野村文學、川端玉章、荒木寛友、石井鼎湖、前田健次郎、大倉保五郎、瀧和亭(門人代理トシテ來ル)

八日

東城鉦太郎君御來臨、教育畫艸稿紫式部石山寺ノ圖家康公細川忠興ニ金ヲ貸與スル圖相渡ス。

十一日

夜ニ入荒木先生ヲ訪問ス。日本美術協會繪畫研究會へ出品ノ觀梅ノ圖着手ス。

十二日

濱村先生來臨、古公去邨之圖染筆越後ノ知人ヨリ届キ候旨ニテ十五圓御持參アル。

十五日

午後ヨリ繪畫研究會へ出席。持參シタル題畫ハ觀梅圖、參考品ハ仇英筆、穆王八駿圖一幅。

東城君へ左ニ圖脱稿シタルニ付送付ス。山内一豊ノ妻夫ニ金ヲ献ズル圖、野中兼山蛤蜊ヲ海中ニ投ズル圖

二十五日

早引。明治美術會評議會へ臨席ス。

二十八日

朝黒川博士御宅へ參リ、教育畫版下ノ檢閲ヲ乞フ。午後ヨリ東城氏ニ到リ、石版下繪三枚丈持參ス、歸路島崎氏ヲ訪ヒ大ニ馳走ニナル。

三月六日

王仁ノ圖着手ス。

十一日

大槻修二先生來臨アル。乾山書類返戻ス。

十三日

繪畫研究ニ王仁ノ圖出品ス。兆殿司羅漢并元信屏風寫真版刷參考トシテ持參ス。

十五日

村田丹陵先生來臨アリ。聖德太子傳借用アリタキ旨御頼アル。

十六日

岸田吟香先生ヲ訪ヒ明治美術會ニ於テ同氏ノ演說筆記ノ修正添削ヲ乞フ。直ニ御渡シアル。

十八日

川島樸平先生肖像落成ニ付浦和へ送付ス。

二十日

吳服町柳屋ニ於テ青年繪畫會有之臨席ス。

二十六日

引掛ヨリ北畠氏同道阪田先生ヲ訪ヒ、同氏大人ノ肖像艸稿ヲツケル。

二十七日

平岡令嬢入門 目錄并雞卵一箱下サル。

四月三日 日曜日

ゆき滿吉召連明治美術會ニ到リ菊池武時出陣ノ圖出品ス。歸路齋藤氏ト同道本多君ヲ訪フ。

五日

田口米舩君來臨、意匠會創立ニ付賛成アラン事ヲ頼談アル。

八日

清水氏來ル。向島ニ於テ觀櫻書畫小集相催ス旨申來リ展觀畫揮毫頼ミアル。下條君ヨリ來ル
十日獨逸國博覽會出品畫ノ義ニ付美術協會ニ參集アリタキ旨通知アル。佐竹永湖先生ヨリ來ル
十日清美會開會ノ義通知アル。明治美術會ヨリ評議員八名撰擧ノ義申來ル。

十日

午前第一時十五分神田猿樂町めしやヨリ出火、折シモ西北ノ風烈シク本石町迄延燒ス。本日
大火ニ付清美會延引トナル。

十六日

ゆき召連向島觀櫻會へ行ク。

十七日

無極庵ニテ清美會ヲ開ク。出席人ハ玉章、寛畝、永湖、米僊、文學、寛友、白龍、楓湖、鼎湖等

二十四日

午後明治美術會展覽會ヘ行ク。加地氏、本多氏、山本氏、菊池氏ト共ニ夕飯ヲ喫ス

二十七日

午後第四時ヨリ明治美術會評議會ヘ臨席ス。

二十八日

日本美術協會ヨリ左ノ通申越ス。

明治二十五年美術展覽會第一出品審査之儀及御委囑候也

日本美術協會々頭

明治二十五年四月

子爵 佐野 常民

石井重賢殿

明治二十五年美術展覽會審査主事及御委囑候也

日本美術協會々頭

明治二十五年四月

子爵 佐野 常民

三十日

石井重賢殿

東洋美術第十二號落成高田君ヨリ十冊相渡下サル。本月發刊ノモノ誠ニ美麗ニ出來タリ。

五月一日

美術展覽會ヲ縦覽ス。歸路動物園ニ到リ鳥類寫生ス。夜ニ入黒川博士ヲ訪問シ、豫テ檢閲ヲ頼ミタル褒賞畫説明ノ禮トシテ金子並雞卵進呈ス。

二日

美術展覽會審査ノ儀ニ付協議有之、午後第三時ヨリ上野美術協會ヘ出席ス。

四日

北畠氏高田氏來臨アリ、前田氏ニ面會スヘキ要用アリ一同連テ美術協會ニ至ル。同氏不在、又同氏自宅ヲ訪ヒ、面會ヲ得、所用ヲ果ス。

五日

夜荒木氏ヲ訪ヒ清美會延日ノ義ニ付協議ス。

七日

明日清美會ヲ延シ、來ル二十二日相催候旨川端氏外夫々ニ通知書出ス。

八日

北畠氏依頼坂田先生肖像艸稿出來ス。清美畫帖第三號版下着手ス。益田香遠先生ヨリ書狀來ル。本日美術協會ニ到リ審査ニ着手ス。柴田令哉先生ト同道、廣小路鳥料理ニテ夕飯ヲ喫ス。

九日

益田香遠先生ヲ訪ヒ、審査ノ儀ニ付協議ス。皇太后宮陛下明治美術會へ行啓アラセラレ候ニ付奉送迎ヲ務ム。間詰氏令嬢ノ席上木炭畫ヲ御覽ニ供ス。今夕美術協會ニ至リ司事。一同ニテ審査事務ニ從事ス。

十日

夜美術協會ニ至リ審査ニ從事ス。

十一日

夜美術協會ニ至リ審査員一同會頭ノ面前ニテ點票ノ説明ヲナス。

十五日 日曜日

清美會畫帖下畫出來ス。白井先生來臨、唐紙切下サル。午後ヨリ美術協會ニ到リ賞狀及小札

等認メ遣ス。

十六日

日本美術協會ニ於テ褒賞授與式ヲ行フ。

二十二日

日本美術協會ニ於テ繪畫研究會アリ、審査投票ス。無極庵ニ於テ清美會ヲ催ス。

二十五日

下條氏ヨリ東宮殿下御席畫ノ事ニ付協議アル旨申來。參上ス。荒木寛友、小堀鞆音ノ二氏モ命セラル。

二十六日

皇太后陛下 日本美術協會へ行啓有之、拜謁仰付ラル。皇太子殿下御畫艸稿ニ着手ス。

二十八日

風邪ニ付引籠。氣分少シクヨクナリタルニ付東宮殿下ノ御畫ヲ畫ク。

二十九日

日本美術協會へ東宮殿下行啓有之、御席畫ヲ務ム。養老孝子圖。小堀鞆音氏「田村將軍」、荒

木寛友氏『花鳥』、御満足ノ御様子ナリ。金屬彫刻ノ席彫アリ。塚田秀鏡氏『松子紙口』、香川勝廣氏『水瓶梅花ノ彫』

六月一日 小雨

大槻如電先生來臨、乾山遺物讓狀添書認メ吳候様頼談アリ。承諾ス。雞卵一折下サル。

二日

大槻氏へ渡シタル書控

記

- | | | |
|-----------|-----|-------------------------------------------|
| 一 乾山陶法 | 一 冊 | 但初代乾山口述二代乾山筆記 |
| 一 全和歌懷紙 | 一 幅 | 但自筆奉弔崇保院宮和歌 |
| 一 全辭世和歌并偈 | 一 葉 | 但添書略譜アリ |
| 一 讓狀 | 三通 | 二代乾山ヨリ三代乾山へ讓狀、三代後室ヨリ抱一上人へ讓狀、抱一上人ヨリ西村菟庵へ讓狀 |

右大小兩箱入其ニ抱一上人箱書アリ

右は西村菟庵より先代三浦乾也に讓られ申候品に御座候先年仔細有之、松澤氏へ相預置、先人歿後も其儘に相成居候處今度先生に於て同氏と御熟議の上御所藏相成度旨被申聞當方聊差

支無之候間何卒御愛藏下され度候將又乾也門人中技藝上達の者へ更に御讓被爲度思召是又御厚志之程難有存候先人と先生とは三十餘年來の御別戀にも有之、旁地下の靈もさこそと一入忝く存上候

明治二十五年六月三日

三浦松次郎

大槻如電先生

三日

伊藤元延先生久々ニテ來ル、相變ラズ結髪頭ナリ。先生自筆ノ扇面及色紙下サル難有々々。

五日

平岡老人御來臨、ゆき縁談ノ儀御申聞アル。およふさま御稽古ニ御出アル。

七日

今戸菊次郎死去ノ旨知ラセアル。

十一日

研究會出品ノ松壑觀流ノ圖ニ着手シ午後二時落成ス。平岡およふさま稽古ニ御出アリ、豊公遺寶圖略二冊下サル、難有。日本美術協會ニ於テ研究會ヲ開ク。本日席上揮毫盛ナリシ。出

品モ十五枚アリ、皆絹本ニシテ精密ノ畫多シ。鹽田老人ヨリ平山省齋翁年回摺物板下御依頼アル。

十三日

下條正雄先生佐世保鎮守府主計官トナラレ明日發足ノ由ニ付見立ノ爲參上ス。平岡君へ伺候處老人御不在。奥様へ委曲ゆき縁談ノ義申上ル。齋藤君へ額縁返上シ御菓子一折進上ス。

十四日

鹽田翁ヨリ平山省齋先生年回摺物へ同翁碑石刷入致度ニ付版下揮毫ノ依頼アリ退局掛谷中墓地ニ至リ碑石ヲ寫ス。

十五日

平山翁版下落成ス。右版下滿吉ヲシテ鹽田君迄届ケシム。

十六日

龜井先生ヲ訪フ。山本氏モ來合セタリ。十八日懇親會ノ事ヲ談ス。

十八日

日本美術協會常會ニ於テ平山君希臘ノ古建築ノ講話アリ。夕刻ヨリ上野櫻雲臺ニ於テ美術家

懇親會ヲ催ス。小山、柳、松岡、加地、佐久間、其他諸君ノ演說アリ。終リニ至リ山本芳翠先生大女ノ出立ニテ舞臺ニ出ラレ、米國大博覽會へ出品ヲ見合セル事ニ付女ノセリフニテ面白ク演說セラル。拍手大喝采。

十九日

川邊氏ヨリ白鶴子百日祭ニ付同子筆ノ日光祭典ノ圖上梓ノ扇子下サル。中野其玉先生御出アリ。本月廿五日乾山翁百五十年祭ニ付尾形流ノ繪畫陶器其他諸器物展觀會相催候旨ニテ盃、摺物等下サル。

二十日

洋畫ヲ擴張スベキ義ニ付神田青柳亭ニ於テ評議會ヲ催ス。出席者松岡、淺井、小山、本多、山本、松井、原田、平瀬、柳、龜井、加地十二氏ナリ。

二十三日

西洋畫擴張ノ爲メ青柳亭集會ス。來臨者ハ松岡、柳、山本、小山、淺井、佐々木、原田、本多、龜井、平瀬、松井、余ト共ニ十二名ナリ。

二十四日

中野其玉先生發起トナリ、乾山百五十回忌追善展覽會ヲ美術協會ニ於テ明二十五日相催候ニ付、幅陶器數點出品シ、供物料トシテ半圓差上ル。

二十五日

乾山百五十年忌追善會ヲ美術協會ニ開ク。ゆき召連觀覽ス。鼎湖ノ出品并榊原ノ出品ハ左記ノ如シ。

- 一 初代乾山枯野繪小皿 三枚
- 一 乾山作茶碗 一個
- 一 三代乾山作小皿 五枚
- 一 初代乾山作茶巾筒 一個
- 一 乾也作茶巾筒 一個
- 一 同作雪ノ松茶碗 一個
- 一 四代乾山書乾也作茶碗 一個
- 一 吉六作小井 一個
- 一 乾山寫香盒 一個



鼎湖の日記繪

- | | | |
|---------------|-----|-----------|
| 一 乾山寫淺草寺茶碗 | 一 個 | |
| 一 儀屋宗理筆六枚折 | 半 雙 | |
| 一 抱一上人筆大津繪三尊佛 | 一 幅 | |
| 一 四代乾山筆梅畫贊 | 一 幅 | 以上十三點重賢出品 |
| 一 乾山作茶碗 | 一 個 | |
| 一 乾也作小井 | 一 個 | |
| 一 同作茶碗 | 一 個 | |
| 一 乾也筆春秋草花 | 雙 幅 | 以上四點榊原出品 |

二十六日

昨日美術協會ニ於テ岡山縣慈惠會總理安田眞月居士ニ面會ス。此人ハ慈惠會經費ヲ集ムルノ一法トシテ來ル七月十五日ヨリ一週間岡山市後樂園ニ於テ慈善書畫大展覽會ヲ開設スルニ付京阪愛知其他諸縣ノ文人墨客ニ依頼シ寄附書畫ヲ集ム。又同縣知事ノ添書ヲ以テ佐野子爵ニ就キ贊助ヲ乞フ。佐野子爵ヨリ此事ヲ余ニ托ス。余モ此美事ヲ贊シ、大ニ周旋スル事ヲ約ス。余ハ研究會へ出品セシ阿佛尼ノ圖ヲ寄附ス。同氏満足セリ。又日本青年繪畫協會へ依頼

スルヲ約シ、本日第七回研究会へ來ル可シ、共ニ同會會頭へ頼込マル可シト約ス。

同日午後第二時向兩國井生村樓ニ開ク青年繪畫會ニ臨席シ、委員長庄司竹真氏ニ岡山市慈善繪畫展覽會へ寄附畫ノ義ヲ依頼ス。同氏大ニ賛成シ、此主意ヲ村田丹陵氏來會員ニ通知ス。一同賛成セリ。安田眞月居士モ又立チテ慈惠會開設以來ノ有様及今回各地方ニ於テ贊助シタル事ト大略ヲ演說シ終リニ臨ミ青年畫家ノ滿堂賛成アリシヲ謝ス。

二十八日

櫻井光雲先生依頼ノ畫帖相認候事。柳源吉君ヨリ本日帝國ホテルノ集會延引ノ旨報知アル。

三十日

前田氏ヨリ借用ノ蕭白ノ山水臨摹ス。

七月二日

佐野會頭ヨリ繪畫研究會改正ノ義ニ付傳達ノ爲主事高頭忠造君來臨アル。

三日

櫻井光雲先生來臨アリ。御依頼ノ山水畫上ル。曾我蕭白山水縮圖版下出來。新羅三郎義光ノ圖着手ス。伊藤元延君御子息繁延殿御出アリ。燒鹽下サル。此御子昔風ノオケシ頭ナリ。メ

ヅラシ。

四日

田原梅谷先生ヲ訪問ス。荒木氏ヨリ返事來ル。北島氏ヨリ東洋美術十八冊送致アル。

八日

青柳亭ニ於テ西洋美術家數人集會アル臨席ス。

十六日

美術協會通常會ニ出席。佐野氏ヨリ會頭ヲ辭シ度由御嘶アリ。就テハ會頭ノ處細川氏へ依頼ノ義御談シアリ。同氏モ不得止情實ニ付略承諾セラレ。

十八日

浦和宿溝口桂巖先生來臨、同氏詩集並川島翁肖像ノ染筆料下サル。尙桂巖翁先大人ノ肖像御依頼アル。

二十七日

小山君ヲ問フ、不在。夜ニ入柳氏ヲ訪問ス。大人病氣追々重症ニナリタリ。誠ニ氣ノ毒千萬。

二十八日

伊藤元延君來臨氷砂糖下サル。

三十一日

中丸先生ヲ訪ヒ、菓子上ル。應舉鯉ノ二枚折見セラル。

八月一日

喜助殿同道ニテ下總伯母様病氣見舞ニ發足シ、大橋ヨリ通連丸ニ乗ル。本日ヨリ七日間避暑休暇トナル。田舎行ニハ好都合ナリ。行キ掛ケ舟橋吉野屋ヘ立寄ル。同所ニテ中喰。午後一時頃金堀村ニ着。伯母様ニ面會ス。少シク病氣輕キ方ナリ。同夜看病ス。

二日

金堀臺矢橋氏ヲ問ヒ、久々ニテ妹お竹ニモ面會ス。大ニ馳走ニナル。同夜金堀ニ歸リ看病ス。

三日

朝金堀村ヲ發足シ、歸路ニ就ク。行徳ニテ中喰、汽船ニテ歸ル。

五日

平八郎一言坂ノ圖下畫着手ス。田中宗確氏ヲ訪ヒ御茶上ル。本多家寶物ノ圖拜見シ、種々説明アル、難有。

六日

高田君ヲ訪ヒ菓子折上ル。富岡君ヲ訪ヒ、義光足柄山ノ圖ヲ進呈ス。

七日

秋季展覽會出品畫艸稿修正ス。今戸茂ニ選名並銅印一顆ヲ贈ル。「乾哉」

十日

洋畫家集會ヲ青柳亭ニ開ク。出席ス。

十一日

平八郎一言坂ノ圖人物ヲ除ク外大略落成ス。前田先生來臨アル。

十六日

荒木先生ヲ訪問ス。米國大博覽會出品畫出來シアリシ。誠ニ感服ノ事ナリ。

十七日

今戸乾哉子過日選名ノ禮ニ來リ、赤飯カマボコ下サレ。

十八日

村田丹陵梶田半古兩先生來臨、青年會審査員投票紙持參ス。

十九日

洋書家集會池ノ端村田屋ニテ開ク。出席ス。

二十一日 日曜

本日終日平八郎ノ圖ヲ畫ク。

二十二日

洋書家ノ集會ヲ御成道御成館ニ開ク。出席ス。

二十七日

洋書家集會アリ出席ス。此日平八郎一言坂ノ圖大略出來ス。

二十八日

ゆき滿吉兩人出品畫下摹ヲナス。

九月一日

滿吉貞次下谷小學校へ入校ニ付ふじ連行。滿吉ハ高等二年生貞次ハ尋常四年生トナル

二日

中丸先生來臨アリ。聖徳太子ノ像御覽ニ入レル。製作ノ精巧ナルニ驚ク。

三日

太子像修補ノ爲今戸乾哉方へ行。歸路塚本、並奥山蓮杖老人ヲ訪フ。

四日

おようさま御稽古ニ御出アル。展覽會出品畫ノ摸寫ニ着手相成。ゆき滿吉モ下書ヲナス。

五日

深川叔父久々病氣ノ處本日午前第五時死去ニ付ふじ悔ニ參ル。本日ヨリ忌引トナル。同夕刻中丸先生ヲ訪フ。玉置老人モ來會ス。

七日

ゆき展覽會出品畫着手ス。渡邊鐵太郎氏ヨリ繪卷返戻アリ。ビール二瓶下サル。

九日

夜ニ入荒木先生來臨アル。

十日

高田先生滿吉畫號ヲ柏亭ト選マル。滿吉本日ヨリ八郎弓勢ノ圖着手ス。青隣九柯翁滿吉印章一顆御自刻下サル。

十一日

おようさま御出アリ。展覽會出品畫菊花ノ圖着手ス。茨城縣人關田淺次郎殿入門アル。小澤方軌先生來臨。後赤壁墨畫御依頼アル。此日日本美術協會繪畫研究會ニ出席シ、石川鴻齋翁沈芥舟學畫講義聽聞ス。終テ投票ノ取纏メヲ爲シ、夫々賞狀相渡シ、又審査員選舉ニ付協義上人名書差出ス。

十二日

荒木先生へ美術協會報告書二十三年五月三十日發行第二十九號貸與ス。

十五日

夜今戸寅吉殿來ル。向島跡引受度旨頼出ル。池ノ端村田亭ニテ小山、柳、其他兩三名參會、林氏へ禮狀出ス事ニ決シ、相認メ、自記調印。

十七日

病氣ニ付出務セズ。午後三時過宮下君御出アリ。書畫幅御覽ニ入ル。

十八日

宮下氏御次男御出アリ。兆殿司羅漢、文晁大和繪、隆古大幅并山水ノ四點借用シタキ旨申越

サル。則御渡申候。燕脂下サル。午後瀧村氏夫婦來臨。ゆき縁組ノ義種々御談シアル。

十九日

第二國立銀行支店支配人早川錄造君ニ啓書記虎溪ニ笑圖御眼ニ掛ル。

二十二日

ふじ同道向じまニ行片附物ヲ爲ス。

二十三日

キヨソネ氏へ又兵衛ノ屏風并師宜祐信ノ畫幅一閱ノ爲持參ス。雨天故大物持參甚難澁ス。

二十五日

顯正女學校創立費惠與ノ畫出來ス。清水信夫發起ノ畫家親睦會ヲ中村樓ニ開ク。出席ス。宮下君來臨、文晁大和繪并兆殿司羅漢御返戻アリ。

二十六日

益田香遠先生ヲ訪ヒ、近松門左衛門自畫贊并祐信ノ繪二幅差上置ク。

三十日

忠勝一言坂ノ圖美術協會へ出品ス。弟子共ノ分三枚、則月下鴛鴦圖、菊花圖、八郎射艦ノ圖

皆出品セリ。

十月一日

田中宗確先生御來臨、平八郎ノ下繪御目ニ掛ル。日本美術協會ヨリ審査囑托狀來ル。

二日

木村君平岡君同道御出アリ。美術學校へ同道ス。楠公銅像ノ木形略落成。美術學校ヨリ米國大博覽會へ出品ノ繪、則、藤原氏時代、足利氏時代、徳川氏時代等ノ裝飾畫略出來セリ。結城正明君ノ説明アリ。歸路八百善ニテ中喰、日本美術協會ノ展覽會ヲ一覽ス。

四日

平岡君尊來。ゆき結納品御持參、御取換セ致ス。即時瀧村方へ御届下サル。夜日本美術協會ニ於テ秋季展覽會審査員始メテ總集會ス。山高、小原、村田、鶴澤、山名、村瀬、川端、前田、瀧、野口、村田(香)、川邊、佐竹、荒木、石井。

六日

村田香谷先生來臨審査ノ義ニ付協議アル。浦野乾哉來リ、太子像修補出來、持參ス。向じまノ事ヲ頼ム。

七日

乾也翁四年祭當日ニ付募參ス。歸路築地門跡ニ於テ第一漆工會ヲ觀覽ス。夜ニ入上野ニ到リ審査ニ着手ス。

八日

ゆき徳川家奥へ上ル、種々賜リ物アリ。

九日 日曜日

おようさま御出アリ、青年繪畫共進會へ出品ノ仲國訪小督圖着手ス。滿吉モ同斷、觀雁知伏ノ圖ニ着手ス。

十日

夜ニ入上野ニ到リ審査ス。

十五日

協會審査結了日ニ付早引ヲ願フ。

十六日

滿吉青年會へ出品畫持參ス。清水氏來リ李白像依囑アル。高田君ニ協會ニテ面會シ、同道シ

テ青年會ヲ觀ル。

十七日 神嘗祭

昨日清水氏ヲ以テ頼越シタル中村樓廣間ニ掛ク可キ飲中八仙ノ合作李白ノ像揮毫ス。清水氏居催促ス。落成シタルニ付渡ス。宮下君來臨。幅類賣却ノ義ニ付種々御嘶アル。山田啓太郎氏來リ啓書記三笑圖返戻アル。田中宗確先生へ忠勝像清正像二幅返上シ、栗、柿、カキノ罐詰等進上ス。

十八日

明治美術會評議員小集アリ。田中會頭辭任ノ義ニ付後會頭選舉其他種々談論アル。

十九日

伯母死去ニ付忌引トナル。ふじ向じまニ行種々取片附ヲナス。寅吉モ來ル。同人ニ遣スモノ取調、渡ス。

二十日

木村君依頼ノ金洞秋色ノ圖落成ス。

二十三日

午後ヨリ野村愛助君宅ニ於テ清美會ヲ開ク。合作等アリ大ニ馳走ニナル。

二十七日

秋季展覽會ノ審査點評平均ナリ。大評議會ヲ開ク、臨席ス。

二十八日

早朝瀧村老人竹男同道ニテ來リ始メテ對面ス。午後第五時ゆき召連瀧村ニ行結婚ノ式ヲ行フ。

三十日

里披キヲ上野櫻雲臺ニ開ク。天氣モヨク、誠ニ都合ヨロシ。

三十一日

竹男ゆき大阪へ發足ニ付送別會ヲ築地ノ壽美屋ニ開ク、ふじ同道能越シ馳走ニナル。午後第二時二十分新橋發車ス、一同見送ル。

十一月二日

秋季美術展覽會褒賞授與式アリ。青年繪畫共進會ニ於テモ褒賞贈與式アリ。

課題 勇

本多忠勝一言坂圖

出品人

石井重賢

鹿冑蜻蛉敵軍ヲ睥睨ス。作者ノ意氣蓋シ亦人後ニ落チズ。

褒賞一等

三日

ふじ、おようさま同道ニテ青年繪畫共進會ニ到リ展觀ヲ見ル。おようさまモ滿吉モ褒詞ツキ
タリ誠ニヨシ。

六日 日曜

大藏大臣閣下ヨリ御依頼ノ靈菴翁肖像ニ着手ス。

皇太子殿下美術協會ニ行啓、重賢出品忠勝一言坂ノ圖御用品トナル、難有。

九日

外出ヲ願ヒ下條君ヲ訪ヒ歸京ヲ祝ス。

十三日

大藏大臣御依頼ノ肖像落成ス。上野廣小路松源樓ニ於テ浮世繪展覽會ヲ小林文七氏發會ニ招
待アリ。優待席ニ於テ茶菓ノ饗應アリ。菓子ハ北齋ノ百字ノ印、歌麿ノ昇降龍ノ印ノ形ナリ。
小林氏ノ注意盡セリ。浮世繪歷代ノ名家ヲ蒐集ス。就中林忠正君出品ノ菱川師宣ノ歌舞伎ノ

屏風實ニ非凡ナリ。其他本間氏出品ノ北齋ノ龍等數十點アリシ。

十四日

宮永剛太郎君來臨アリ。殿司羅漢二幅、笠翁ノ武者、江漢鳩ノ四點賣却ヲ頼ム。

二十日

午後彫工會秋季競技會ヲ觀覽ス。一川君御依頼ノ武陵桃源ノ圖ニ着手ス。

二十二日

退局掛一川君ヲ訪ヒ、先年畫キタル劉阮天台ノ圖借用ス。

二十七日

武陵桃源ノ圖落成ス、此圖美術協會ノ繪畫研究會ニ出品ス。

十二月三日

本年春季美術展覽會審査報酬トシテ佐野會頭ヨリ木杯一個贈與アル、難有。

四日 日曜

宮永氏來訪アル。鈴木春信版繪并長崎版ロシヤ人ノ圖進呈ス。小倉君御依頼ノ近江湖水ノ眞
景ノ額着手ス。殆落成。

十日

海野君依頼ノ松鶴圖着手ス。

十五日

矢橋氏依頼富士山ノ圖、并山水着手ス。

二十四日

黒川博士へ印刷局ヨリ謝禮トシテ二十圓贈與アリ、小生持參ス。古田老人來ル。佩文齋書畫論唐宋元明ノ部一帙廿四冊貸與ス。

二十五日

北畠氏取次坂田翁肖像落成ス。

二十九日

早朝ヨリ年玉扇子揮毫、高田先生來臨雞卵一折下サル。

三十一日

日本美術協會ヨリ木盃一個下サル。佐野會頭ヨリ叮嚀ナル禮狀來ル。



明治二十六年一月二日

本日試筆。平岡おようさま御出、試筆ナサル。満吉モ試筆ス。成瀬君來臨、梅枝并御菓子下サル。益田君來臨、兩君試筆畫へ替句ヲ添へラル。

三日

今戸浦野乾哉來リ自製ノ尉姥下サル。又神功皇后御像半製品持參アリ。質問アル。説明ス。

五日

益田君へ參上。御馳走。伯母さまの三味線にて金時を舞ふ。誠に大酔、人車にて送らる。氣の毒の事也。

八日

島崎君ヲ訪ヒ試筆ヲナス。

九日

足部ニ腫物相發シ難澁ニ付當分和服用ノ義届出ス。

十日

足部腫物痛甚シ診療所ニテ切斷シ膿ヲ取ル。此日午前十時ヨリ退局ヲ願フ。病ナレバ據ナシ。